

地域環境に対する住民の評価に関する調査
—足立区における調査結果の概要—

平成 24 年 2 月

文部科学省科学研究費・新学術領域研究
「社会連帯の形成・維持機構の解明」研究班

目 次

I 調査目的	3
II 調査方法	3
III 調査メンバー	3
IV 結果	4
1. 対象者の特性	4
1) 基本属性	
2) 社会階層	
3) 出身地、居住年数	
4) 居住する自治体の規模	
2. 近所づきあい	6
1) 近所づきあいの内容と頻度	
2) 近所づきあいと回答者の属性との関連	
3) 親しい隣人の属性	
3. 友人・親戚・職場の人とのつきあい	10
1) 交流頻度	
2) 親しい別居親族数	
3) 親しい同僚数・仕事仲間数・隣人数	
4) 親しい友人数	
5) 親しい友人の属性	
4. 組織への参加	17
1) 組織別にみた参加割合	
2) 組織類型別にみた参加割合と回答者の属性との関連	
3) 組織類型別にみた参加頻度の分布	
4) 組織類型別にみた参加頻度と回答者の属性との関連	
5) 最も重要だと思う参加組織	
6) 最も重要だと思う参加組織の構成員の属性	
5. 社会的サポート	30
1) 受領サポート	
2) 提供サポート	
3) 否定的相互作用	

6. 連結型の社会関係資本-----	33
1) 種類別にみた連結型の社会関係資本の分布	
2) 連結型の社会関係資本数と回答者の属性との関連	
7. 集合的効力感-----	35
1) 集合的効力感に関する項目の分布	
2) 集合的効力感と回答者の属性との関連	
8. 地域の環境問題・犯罪認知-----	37
1) 種類別にみた地域の環境問題に対する認知の分布	
2) 種類別にみた地域の環境問題に対する認知と回答者の属性との関連	
3) 地域の犯罪に対する認知の分布	
4) 地域の犯罪に対する認知と回答者の属性との関連	
9. 地域への愛着、地域への満足度-----	40
1) 地域への愛着	
2) 地域への満足度	
10. 孤立感、生活満足度-----	42
1) 孤立感	
2) 生活満足度	
11. パソコンや携帯電話の利用-----	44
1) 利用内容	
2) インターネットの利用時間	
12. 健康維持のための習慣や行動-----	46
1) 健康維持習慣	
2) 食生活への配慮	
13. 健康-----	48
1) 健康度自己評価	
2) 精神的健康	
3) 通院	
14. 政治に対する意識-----	51
1) 政治的効力感と政治家への信頼の分布	
2) 政治に対する有効性感覚・信頼と回答者の属性との関連	
3) 国・地域レベルの政治的有効性感覚	
4) 政党支持	

I 調査目的

本調査の目的は、大都市部に居住する人々が居住する地域環境をどのように評価しているか、また、それらがそこに人々の健康や生活にどのような影響をもたらす可能性があるのかを明らかにすることにある。

この報告では、研究に限定された分析の詳細を示すのではなく、調査データから見えてきた住民の地域生活と健康の概要について紹介する。結果は、単純集計とともに、年齢階級、性、世帯年収、居住する自治体の人口規模とのクロスの結果をも紹介する。

II 調査方法

1. 対象

東京都足立区に居住する50歳以上の住民人2,500人を住民基本台帳に基づき無作為に抽出した。

2. 調査項目

社会関係、地域住民の評価、地域環境の評価、健康、社会階層。

3. 調査方法

自記式調査票に基づき、郵送法により調査を行った。

4. 回収数・率

回収数は866であり、回収率は34.6%であった。

III 調査メンバー

杉澤 秀博 (桜美林大学大学院・老年学研究科・教授、代表)

原田 謙 (実践女子大学・人間社会学部・准教授)

杉原 陽子 (地方独立行政法人東京都健康長寿医療センター・主任研究員)

柳沢 志津子 (東洋学園大学・人文学部・准教授)

新名 正弥 (地方独立行政法人東京都健康長寿医療センター・研究員)

IV 結果

1. 対象者の特性

1) 基本属性 (表1-1)

年齢階級別分布をみると、50～59歳が26.1%、60～69歳が38.8%、70歳以上が35.1%であった。性別分布では、男性が63.6%を占めていた。世帯構成は、単独世帯が13.7%であった。

表1-1 基本属性の単純集計(%)

年齢階級	50-59歳	60-69歳	70歳以上	
	26.1	38.8	35.1	
性	男性	女性		
	63.6	36.4		
世帯構成	単独	夫婦のみ	その他	無回答
	13.7	28.4	55.8	2.1

N=866

2) 社会階層 (表1-2)

学歴、職業、収入、住宅の4つの側面から階層分布をみてみた。学歴は、「中学校卒」「高等学校・専門学校・専修学校卒」がそれぞれ26.1%と47.7%であった。職業階層(無職者も含む)をみると、上位には「販売・サービス」(10.4%)、「管理職」(9.0%)が位置していた。

世帯年収の分布をみると、「300万円未満」が27.7%、「300～500万円未満」が25.6%、「500～1000万円未満」が25.6%、「1000万円以上」が12.1%であった。住宅階層は、「持家」が71.0%であり、「賃貸」(26.6%)の3倍弱であった。

表1-2 社会階層の単純集計(%)

最終学歴	中学校卒	高等学校・専門学校・専修学校卒	短大・高専卒	大学・大学院卒	その他	無回答		
	26.1	47.7	5.1	18.4	0.5	2.2		
職業階層	管理職	専門職	技術職	事務職	販売・サービス	農林漁業	技能	生産
	9.0	4.6	3.9	8.7	10.4	0.8	4.1	2.3
	労務	就業、職業は無回答	未詳	無回答				
	6.9	3.8	41.0	4.5				
世帯年収	300万円未満	300-500万円未満	500-1000万円未満	1000万円以上	わからない	無回答		
	27.7	25.6	25.6	12.1	5.5	3.3		
住宅階層	持家	賃貸	その他	無回答				
	71.0	26.6	0.9	1.5				

N=866

3) 出身地、居住年数 (表 1 - 3)

出身地の一つの指標である中学卒業時の居住地については、「現在と同じ住所」という人が 9.0%、住所は異なるが「現在と同じ区内」である人が 18.8%、住所は異なるが、「現在と同じ 1 都 3 県」である人が 29.1%であった。

現在の住所における居住年数は、20 年以上（「20～30 年未満」と「30 年以上」の合計）が 53.4%で半数を超えていた。「10 年未満」が 25.7%であった。

表 1-3 出身地、居住年数の単純集計 (%)

出身地	現在の住所	現在と同じ区	現在と同じ 1都3県内	茨城・栃木・ 群馬・山梨	その他	無回答
(中学卒業時)	9.0	18.8	29.1	9.0	32.0	2.1
居住年数	10 年未満	10-20 年未満	20-30 年 未満	30 年以上	無回答	
	25.7	19.1	13.2	40.2	1.8	

N=866

2. 近所づきあい

1) 近所づきあいの内容と交流のある近隣数 (表2-1)

近所づきあいの内容については、「生活面で協力し合っている」から、「まったくしていない」までの4段階で測定した。「生活面で協力し合っている」という人は13.5%、「日常的に話をする」という程度の人42.0%であった。「まったくしていない」とする人は2.2%であった。

交流のある近隣数は、「かなり多い(20人以上)」とする人が8.1%、「ある程度の人(5~19人)」という人が38.9%、「少数の人(4人以下)」という人が42.3%であった。「だれかもしらない」という人は6.8%であった。

表2-1 近所づきあいの程度の単純集計(%)

交流の内容	生活面で協力し合っている	日常的に話をする	あいさつする	まったくしていない	無回答
	13.5	42.0	38.8	2.2	3.5
交流のある近隣数	かなり多い(20人以上)	ある程度の人(5~19人)	少数の人(4人以下)	だれかもしらない	無回答
	8.1	38.9	42.3	6.8	3.9

N=866

2) 近所づきあいと回答者の属性との関連

近所づきあいの内容や交流のある近隣数の分布が、年齢階級、性、世帯年収によって異なるか否かをみてみた(表2-2)。近所づきあいの内容については、年齢階級、性によって差がみられた。近所の人と「生活面で協力している」あるいは「日常的に話をする」とする人の合計割合は、年齢階級が50~59歳の人では39.0%であったのに対し、65歳以上の人では70.3%と約2倍であった。同じく、「生活面で協力している」あるいは「日常的に話をする」とする人の合計割合は合計女性では69.5%と男性の50.8%よりも約20ポイント高かった。世帯年収による差は顕著でなかった。

表2-2 近所づきあいの内容のクロス表(%)

—年齢階級、性、世帯年収、居住する自治体の人口規模別

		n	生活面で協力	日常的に話をする	あいさつする	まったくしていない	計
年齢階級	50-59歳	223	10.3	28.7	57.0	4.0	100.0
	60-69歳	323	16.1	42.7	39.3	1.9	100.0
	70歳以上	290	14.5	55.8	28.3	1.4	100.0
性	男性	534	10.3	40.5	46.8	2.4	100.0
	女性	302	20.5	49.0	28.5	2.0	100.0
世帯年収	300万円未満	224	16.1	42.4	37.0	4.5	100.0
	300-500万円未満	212	11.3	46.2	42.0	0.5	100.0
	500-1,000万円未満	221	11.8	43.9	42.1	2.2	100.0
	1,000万円以上	104	20.2	34.6	43.3	1.9	100.0

注)無回答は除外して集計。

交流のある近隣数についても、年齢階級、性、世帯年収別に比較してみると、年齢階級については近所づきあいの内容の結果と共通していた（表2-3）。すなわち、交流のある近隣数が「かなり多い」あるいは「ある程度」とする人の合計割合は、年齢階級が50～59歳の人では36.5%に対し、65歳以上の人では56.4%と20ポイント程度高い値を示していた。しかし、近所づきあいの内容と異なり、性による差は顕著でなく、世帯年収による差も小さかった。

表2-3 交流のある近所の人数のクロス表(%)
—年齢階級、性、世帯年収別—

		n	かなり多い	ある程度の人	少数の人	だれもしらない	計
年齢階級	50-59歳	222	3.6	32.9	50.9	12.6	100.0
	60-69歳	321	9.3	41.5	43.0	6.2	100.0
	70歳以上	289	11.1	45.3	39.8	3.8	100.0
性	男性	530	9.8	35.5	46.8	7.9	100.0
	女性	302	6.0	49.3	39.1	5.6	100.0
世帯年収	300万円未満	23	8.5	39.9	41.7	9.9	100.0
	300-500万円未満	210	7.6	37.6	47.6	7.2	100.0
	500-1,000万円未満	221	6.3	42.1	47.1	4.5	100.0
	1,000万円以上	104	16.4	39.4	36.5	7.7	100.0

注)無回答は除外して集計。

3) 親しい隣人の属性

(1) 属性の特徴 (表2-4)

親しい隣人の属性の特徴について、性、年齢、学歴分布をみてみた。性については、「すべて男性」「男性の方が多い」が計12.8%、「すべて女性」「女性の方が多い」が計17.7%で、親しい隣人としては女性の方がやや多いという傾向がみられた。年齢層については、「自分と同じ年齢層がほとんど」が24.8%、「自分と異なる年齢層がほとんど」が5.1%で、親しい隣人としては自分と同じ年齢層という人が多かった。学歴については、「自分と同じ学歴がほとんど」が21.2%、「自分と異なる学歴がほとんど」が6.0%で、この面でも自分と同じような特性をもつ人が多かった。

表2-4 親しい隣人の構成の単純集計(%)

すべて男性	男性の方が多い	男性・女性半々	女性の方が多い	すべて女性	無回答	非該当
4.4	8.4	12.0	10.8	6.9	2.4	55.1
自分と同じ年齢層がほとんど	自分と異なる年齢層が半数	自分と異なる年齢層がほとんど	無回答	非該当		
24.8	12.3	5.1	2.7	55.1		
自分と同じ学歴がほとんど	自分と異なる学歴が半数	自分と異なる学歴がほとんど	無回答	非該当		
21.2	14.6	6.0	3.1	55.1		

N=866

(2) 親しい隣人の属性と回答者の属性との関連 (表2-5)

親しい隣人の性別構成を男女別にみると、男性では「男女半々」が36.8%であるのに対し、女性では18.0%である。男性の方が、女性よりも親しい隣人に異性の人を含んでいることが分かる。

表2-5 親しい隣人の性別構成のクロス表(%)

一年齢階級、性、世帯年収別

		n	すべて 男性	男性の方 が多い	男性・女性 半々	女性の方 が多い	すべて 女性	計
年齢階級	50-59 歳	76	9.2	19.7	32.9	26.3	11.8	100.0
	60-69 歳	154	11.0	22.7	21.4	27.9	16.9	100.0
	70 歳以上	138	10.0	16.7	33.3	21.7	18.1	100.0
性	男性	201	18.9	35.8	36.8	7.0	1.5	100.0
	女性	167	0.0	0.6	18.0	47.3	34.1	100.0
世帯年収	300 万未満	103	5.8	14.6	35.0	28.2	16.5	100.0
	300-500 万未満	93	14.0	21.5	32.3	22.6	9.7	100.0
	500-1,000 万未満	88	12.5	22.7	22.7	27.3	14.8	100.0
	1,000 万以上	47	12.8	36.2	19.1	17.0	14.9	100.0

注)無回答は除外して集計。

親しい隣人の年齢構成を年齢・性・世帯年収別にみても、いずれの変数とも有意な関連はみられなかった (表2-6)。

表2-6 親しい隣人の年齢構成のクロス表(%)

一年齢階級、性、世帯年収別

		n	自分と同じ 年齢層が ほとんど	自分と異なる 年齢層が 半数	自分と異なる 年齢層が ほとんど	計
年齢階級	50-59 歳	75	48.0	36.0	16.0	100.0
	60-69 歳	153	66.0	26.1	7.8	100.0
	70 歳以上	138	56.5	29.0	14.5	100.0
性	男性	201	58.7	31.3	10.0	100.0
	女性	165	58.8	26.7	14.5	100.0
世帯年収	300 万未満	103	5.8	14.6	35.0	100.0
	300-500 万未満	93	14.0	21.5	32.3	100.0
	500-1,000 万未満	88	12.5	22.7	22.7	100.0
	1,000 万以上	47	12.8	36.2	19.1	100.0

注)無回答は除外して集計。

親しい隣人の学歴構成を年齢階級別にみると、50代の人ほど、自分と異なる学歴の人が親しい隣人に多いことが分かる。性と世帯年収との関連はみられなかった（表2-7）。

表2-7 親しい隣人の学歴構成のクロス表(%)
—年齢階級、性、世帯年収別

		n	自分と同じ 学歴が ほとんど	自分と異なる 学歴が 半数	自分と異なる 学歴が ほとんど	計
年齢階級	50-59 歳	74	35.1	47.3	17.6	100.0
	60-69 歳	154	55.8	30.5	13.6	100.0
	70 歳以上	134	53.7	32.8	13.4	100.0
性	男性	200	46.0	38.0	16.0	100.0
	女性	162	56.8	30.9	12.3	100.0
世帯年収	300 万未満	101	54.5	28.7	16.8	100.0
	300-500 万未満	92	54.3	32.6	13.0	100.0
	500-1,000 万未満	87	46.0	37.9	16.1	100.0
	1,000 万以上	47	48.9	40.4	10.6	100.0

注)無回答は除外して集計。

3. 友人・親戚・職場の人とのつきあい

1) 交流頻度

(1) 交流頻度の分布 (表3-1)

友人・知人とのつきあい(職場以外で)が「日常的にある(毎日から週数回程度)」という人が15.7%であるのに対し、「めったにない(年に1回から数年に1回程度)」あるいは「まったくない」という人もあわせて19.3%にのぼる。親戚・親類とのつきあいが「めったにない」あるいは「まったくない」という人もあわせて26.9%いた。

表3-1 友人・親戚・職場の人とのつきあいの単純集計(%)

	日常的に ある	ある程度 頻繁にある	ときどき ある	めったに ない	まったく ない	無回答
友人・知人とのつきあい	15.7	30.7	29.8	14.2	5.1	4.5
親戚・親類とのつきあい	6.0	18.2	41.2	24.2	2.7	7.6
職場の同僚とのつきあい	6.5	14.1	24.9	14.0	22.7	17.8

N=866

(2) 友人・知人との交流頻度と回答者の属性との関連 (表3-2)

年齢階級別にみると、70歳以上の21.2%が「日常的にある」と回答しており、そのほかの年齢階級に比べて友人・知人との交流頻度が高い。男女別にみると、女性の21.7%が「日常的にある」と回答している。一方、男性の18.4%は「めったにない」と回答しており、女性の方が男性よりも、友人・知人との交流頻度が高いことが分かる。

表3-2 友人・知人とのつきあい(職場以外で)のクロス表(%)

—年齢階級、性、世帯年収別

		n	日常的に ある	ある程度 頻繁にある	ときどき ある	めったに ない	まったく ない	計
年齢階級	50-59歳	225	8.4	25.8	40.0	20.4	5.3	100.0
	60-69歳	329	17.9	35.3	30.4	12.8	3.6	100.0
	70歳以上	273	21.2	33.7	24.9	12.8	7.3	100.0
性	男性	523	13.4	28.7	33.7	18.4	5.9	100.0
	女性	304	21.7	38.2	27.0	8.9	4.3	100.0
世帯年収	300万未満	224	17.9	35.3	26.3	12.5	8.0	100.0
	300-500万未満	212	18.4	29.7	33.5	15.6	2.8	100.0
	500-1,000万未満	220	10.9	32.7	34.1	17.3	5.0	100.0
	1,000万以上	104	16.3	30.8	38.5	11.5	2.9	100.0

注)無回答は除外して集計。

(3) 親戚・親類との交流頻度と回答者の属性との関連 (表3-3)

親戚・親類とのつきあいを男女別にみると、女性の方が男性よりも「日常的にある」「ある程度頻繁にある」と回答している比率が高い。親戚・親類とのつきあいの年齢階級・世帯年収による大きな違いはみられない。

表3-3 親戚・親類とのつきあいのクロス表(%)

一年齢階級、性、世帯年収別

		n	日常的に ある	ある程度 頻繁にある	ときどき ある	めったに ない	まったく ない	計
年齢階級	50-59 歳	225	4.0	18.7	41.8	33.8	1.8	100.0
	60-69 歳	314	6.4	18.5	47.8	24.2	3.2	100.0
	70 歳以上	261	8.8	22.2	43.3	22.2	3.4	100.0
性	男性	509	5.1	18.5	44.0	28.5	3.9	100.0
	女性	291	8.9	22.0	45.7	22.3	1.0	100.0
世帯年収	300 万未満	214	6.5	19.6	40.7	26.6	6.5	100.0
	300-500 万未満	207	6.3	19.8	47.3	24.2	2.4	100.0
	500-1,000 万未満	216	5.6	19.0	46.8	27.8	0.9	100.0
	1,000 万以上	101	5.0	19.8	47.5	27.7	0.0	100.0

注)無回答は除外して集計。

(4) 職場の同僚との交流頻度と回答者の属性との関連 (表3-4)

職場の同僚とのつきあい(職場以外で)を年齢階級別にみると、50代の方が、「日常的にある」「ある程度頻繁にある」という回答比率が高く(それぞれ10.9%、21.8%)、職場の同僚との交流頻度が高いことが分かる。男女別にみると、女性の方が「まったくない(もしくははない)」と回答している比率が高い。世帯年収別にみると、1,000万以上の人が「日常的にある」「ある程度頻繁にある」という回答比率が高い(それぞれ9.5%、27.4%)。

表3-4 職場の同僚とのつきあい(職場以外で)のクロス表(%)

一年齢階級、性、世帯年収別

		n	日常的に ある	ある程度 頻繁にある	ときどき ある	めったに ない	まったく ない	計
年齢階級	50-59 歳	220	10.9	21.8	34.1	15.0	18.2	100.0
	60-69 歳	290	7.9	18.6	33.4	16.6	23.4	100.0
	70 歳以上	202	4.5	9.9	21.8	19.8	44.1	100.0
性	男性	474	8.0	19.0	31.6	18.1	23.2	100.0
	女性	238	7.6	13.4	27.7	14.7	36.6	100.0
世帯年収	300 万未満	184	6.0	15.8	27.2	15.2	35.9	100.0
	300-500 万未満	180	11.1	13.9	29.4	21.7	23.9	100.0
	500-1,000 万未満	203	6.9	19.2	34.5	16.7	22.7	100.0
	1,000 万以上	95	9.5	27.4	37.9	10.5	14.7	100.0

注)無回答は除外して集計。

2) 親しい別居親族数

(1) 親しい別居親族数の分布 (表3-5)

日頃から何かと頼りにし親しくしている別居の親族数(両親・子どもを含む)の平均値をみると、その総数は6.44人であった。距離別にみると、近距離親族数(30分未満)が2.17人、中遠距離親族数(30分~2時間未満)が2.39人、遠距離親族数(2時間以上)が1.88人であった。

表3-5 親しい親族数の単純集計(人)

近距離親族数	中距離親族数	遠距離親族数	親族総数
2.17	2.39	1.88	6.44

注1) N=844

注2) 近距離とは通常の交通手段で30分未満、中遠距離とは30分~2時間未満、遠距離とは2時間以上。

(2) 親しい別居親族数と回答者の属性との関連 (表3-6)

年齢階級別にみると、近距離親族数、中距離親族数は、70歳以上で最も多い。遠距離親族数では、年齢階級による差はみられなかった。男女別にみると、中遠距離親族数、遠距離親族数、そして親族総数とも、男性の方が女性よりも多い。近距離親族数では、男女差はみられなかった。世帯年収別にみると、年収が高い人ほど、遠距離親族数および親族総数が多い。近距離親族数と中距離親族数では、世帯年収による差はみられなかった。

表3-6 親しい親族数のクロス表(平均値(人))

— 年齢階級、性、世帯年収別

		n	近距離親族数	中距離親族数	遠距離親族数	親族総数
年齢階級	50-59歳	223	1.52	1.86	2.19	5.57
	60-69歳	330	2.26	2.49	1.99	6.75
	70歳以上	291	2.56	2.68	1.51	6.74
性	男性	536	2.29	2.60	2.16	7.05
	女性	308	1.96	2.03	1.38	5.37
世帯年収	300万未満	236	1.89	2.21	1.26	5.36
	300-500万未満	216	2.17	2.45	1.79	6.40
	500-1,000万未満	217	2.20	2.53	2.64	7.36
	1,000万以上	105	2.82	2.78	2.54	8.14

注) 無回答は除外して集計。

3) 親しい同僚数・仕事仲間数・隣人数

(1) 親しい同僚数・仕事仲間数・隣人数の分布 (表3-7)

日頃から何かと頼りにし親しくしている同僚数・仕事仲間数・隣人数の平均値はそれぞれ、2.14人、2.12人、2.09人であった。

表3-7 親しい同僚数・仕事仲間数・隣人数の単純集計(人)

同僚数	仕事仲間数	隣人数
2.14	2.12	2.09

N=849

(2) 親しい同僚・仕事仲間・隣人数と回答者の属性との関連 (表3-8)

日頃から何かと頼りにし親しくしている同僚数・仕事仲間数・隣人数の平均値を年齢階級別にみると、同僚数および仕事仲間数は50代の人ほど多い。一方、隣人数は、70歳以上の人ほど多いことが分かる。男女別にみると、同僚数および仕事仲間数は、男性の方が女性より多い。隣人数では男女差はみられなかった。世帯年収別にみると、同僚数・仕事仲間数・隣人数は、年収が高い人ほど多い。

表3-8 親しい同僚数・仕事仲間数・隣人数のクロス表(平均値(人))

—年齢階級、性、世帯年収別

		n	同僚数	仕事仲間数	隣人数
年齢階級	50-59歳	225	3.08	2.77	1.52
	60-69歳	333	2.14	2.16	2.11
	70歳以上	291	1.41	1.56	2.52
性	男性	539	2.57	2.74	2.04
	女性	310	1.38	1.03	2.18
世帯年収	300万未満	236	1.43	1.53	1.76
	300-500万未満	219	2.09	1.79	1.84
	500-1,000万未満	220	2.49	2.58	2.19
	1,000万以上	105	3.93	3.94	3.18

注)無回答は除外して集計。

4) 親しい友人数

(1) 親しい友人数の分布 (表3-9)

親しい友人数の平均値をみると、その総数は3.64人であった。距離別にみると、近距離親族数(30分未満)が1.24人、中遠距離親族数(30分~2時間未満)が1.72人、遠距離親族数(2時間以上)が0.68人であった。

表3-9 親しい友人数の単純集計(人)

近距離友人数	中距離友人数	遠距離友人数	友人総数
1.24	1.72	0.68	3.64

注1) N=822

注2) 近距離とは通常の交通手段で30分未満、中遠距離とは30分~2時間未満、遠距離とは2時間以上。

(2) 親しい友人数と回答者の属性との関連 (表3-10)

いずれの友人数においても、年齢階級差および性差はみられなかった。世帯年収別にみると、年収が高い人ほど、遠距離友人数および友人総数が多い。

表3-10 親しい友人数のクロス表(平均値(人))

—年齢階級、性、世帯年収別

		n	近距離友人数	中距離友人数	遠距離友人数	友人総数
年齢階級	50-59歳	221	0.97	1.76	0.81	3.53
	60-69歳	325	1.45	1.94	0.74	4.13
	70歳以上	276	1.21	1.45	0.52	3.18
性	男性	521	1.21	1.80	0.74	3.74
	女性	301	1.30	1.59	0.58	3.48
世帯年収	300万未満	228	1.17	1.47	0.37	3.01
	300-500万未満	211	1.25	1.53	0.79	3.57
	500-1,000万未満	215	1.13	2.12	0.85	4.11
	1,000万以上	104	1.74	2.13	1.05	4.92

注) 無回答は除外して集計。

5) 親しい友人の属性

(1) 属性の特徴 (表3-11)

親しい友人の属性の特徴について、性、年齢、学歴の分布をみてみた。性については、「すべて男性」あるいは「男性の方が多い」が計 29.4%、「すべて女性」あるいは「女性の方が多い」が計 23.0%で、親しい友人としては性別にみて著しい偏りはみられなかった。年齢層については、「自分と同じ年齢層がほとんど」が 44.0%、「自分と異なる年齢層がほとんど」が 4.4%で、親しい友人としては自分と同じ年齢層という人が多かった。学歴については、「自分と同じ学歴がほとんど」が 37.1%、「自分と異なる学歴がほとんど」が 5.5%で、この面でも自分と同じような特性をもつ人が多かった。

表3-11 親しい友人の構成の単純集計(%)

すべて男性	男性の方が多い	男性・女性半々	女性の方が多い	すべて女性	無回答	非該当
17.9	11.5	8.3	10.9	12.1	1.4	37.9
自分と同じ年齢層がほとんど	自分と異なる年齢層が半数	自分と異なる年齢層がほとんど	無回答	非該当		
44.0	12.2	4.4	1.5	37.9		
自分と同じ学歴がほとんど	自分と異なる学歴が半数	自分と異なる学歴がほとんど	無回答	非該当		
37.1	18.0	5.5	1.5	37.9		

N=866

(2) 友人の属性と回答者の属性との関連 (表3-12)

親しい友人の性別構成を男女別にみると、男性の方が女性よりも異性の友人を含んでいる比率が高い。世帯年収との関連はみられなかった。

表3-12 親しい友人の性別構成のクロス表(%)

一年齢階級、性、世帯年収別

		n	すべて男性	男性の方が多い	男性・女性半々	女性の方が多い	すべて女性	計
年齢階級	50-59 歳	147	33.3	13.6	17.0	11.6	24.5	100.0
	60-69 歳	217	30.9	22.1	11.1	18.4	17.5	100.0
	70 歳以上	162	24.1	19.8	14.2	22.8	19.1	100.0
性	男性	319	47.3	30.7	16.3	4.1	1.6	100.0
	女性	207	1.9	1.0	9.7	39.1	48.3	100.0
世帯年収	300 万未満	139	26.6	17.3	14.4	15.8	25.9	100.0
	300-500 万未満	141	30.5	20.6	14.9	19.1	14.9	100.0
	500-1,000 万未満	142	29.6	20.4	12.7	19.0	18.3	100.0
	1,000 万以上	72	41.7	20.8	13.9	8.3	15.3	100.0

注)無回答は除外して集計。

親しい友人の年齢構成を年齢・性・世帯年収別にみたが、いずれとも有意な関連はみられなかった（表3-13）。

表3-13 親しい友人の年齢構成のクロス表(%)

一年齢階級、性、世帯年収別

		n	自分と同じ 年齢層が ほとんど	自分と異なる 年齢層が 半数	自分と異なる 年齢層が ほとんど	計
年齢階級	50-59 歳	147	72.1	19.7	8.2	100.0
	60-69 歳	217	78.3	16.6	5.1	100.0
	70 歳以上	161	65.2	25.5	9.3	100.0
性	男性	319	72.4	21.3	6.3	100.0
	女性	206	72.8	18.4	8.7	100.0
世帯年収	300 万未満	138	71.7	20.3	8.0	100.0
	300-500 万未満	141	73.8	17.0	9.2	100.0
	500-1,000 万未満	142	71.1	23.2	5.6	100.0
	1,000 万以上	72	79.2	16.7	4.2	100.0

注)無回答は除外して集計。

親しい友人の学歴構成を年齢・性・世帯年収別にみたが、いずれとも有意な関連はみられなかった（表3-14）。

表3-14 親しい友人の学歴構成のクロス表(%)

一年齢階級、性、世帯年収別

		n	自分と同じ 学歴が ほとんど	自分と異なる 学歴が 半数	自分と異なる 学歴が ほとんど	計
年齢階級	50-59 歳	147	60.5	30.6	8.8	100.0
	60-69 歳	217	61.8	30.0	8.3	100.0
	70 歳以上	161	60.9	28.6	10.6	100.0
性	男性	200	46.0	38.0	16.0	100.0
	女性	162	56.8	30.9	12.3	100.0
世帯年収	300 万未満	138	71.7	20.3	8.0	100.0
	300-500 万未満	141	73.8	17.0	9.2	100.0
	500-1,000 万未満	142	71.1	23.2	5.6	100.0
	1,000 万以上	72	79.2	16.7	4.2	100.0

注)無回答は除外して集計。

4. 組織への参加

1) 組織別にみた参加割合 (表4-1)

組織への参加については、「町内会・自治会」という人が52.7%と最も多く、「同窓会」、「スポーツ関連」が続いていた。「ボランティア」、「宗教」、「学習」あるいは「業界団体」への参加は10%以下にとどまっていた。「政治関係」や「市民・消費者運動」への参加は7%未満であった。

表4-1 組織への参加の単純集計(%)

	入っている	入っていない	無回答
町内会・自治会	52.7	46.1	1.3
同窓会	32.9	65.8	1.3
スポーツ関連	20.3	78.4	1.3
趣味	16.5	82.2	1.3
業界・同業者	12.0	86.7	1.3
婦人会・老人クラブ	11.1	87.6	1.3
生協	9.8	88.9	1.3
ボランティア	9.6	89.1	1.3
宗教	8.9	89.8	1.3
学習活動	7.3	91.5	1.3
政治関係	6.5	92.3	1.3
PTA	2.3	96.4	1.3
市民・消費者運動	1.5	97.2	1.3

N=866

以下では、組織の類型を地縁的、スポーツ・趣味・学習、生協・ボランティア、その他の組織に4区分し、組織の類型別に参加割合が年齢階級、性、収入階層によってどのように異なるかを分析した。

2) 組織類型別にみた参加割合と回答者の属性との関連

(1) 地縁的組織 (表4-2)

地縁的組織に参加している人とは、「町内会・自治会」、「婦人会、老人クラブ、青年団」あるいは「PTA」のいずれかの組織に参加している人とした。年齢階級による違いをみると、参加している人の割合は、70歳以上の年齢層では70.3%であるのに対し、50-60歳未満の就労期にあたる年齢層では38.1%と低かった。世帯年収による違いをみると、参加している人の割合は300万円と1,000万円以上の世帯では60%程度であったのに対して、500-1,000万円未満の世帯では52.3%と多少低かった。性による違いは顕著でなかった。

表4-2 地縁的組織への参加のクロス表 (%)

一年齢階級、性、世帯年収別

		n	参加している	参加していない	計
年齢階級	50-60歳未満	226	38.1	61.9	100.0
	60-70歳未満	333	58.0	42.0	100.0
	70歳以上	296	70.3	29.7	100.0
性	男性	542	55.5	44.5	100.0
	女性	313	59.4	40.6	100.0
世帯年収	300万円未満	235	60.0	40.0	100.0
	300-500万円未満	220	56.8	43.2	100.0
	500-1,000万円未満	222	52.3	47.7	100.0
	1,000万円以上	105	61.9	38.1	100.0

注) 無回答は除外して集計。

(2) スポーツ・趣味・学習組織（表4-3）

スポーツ・趣味・学習組織への参加している人とは、「スポーツ関係のグループやクラブ」、「趣味の会」あるいは「学習活動の会」のいずれかに参加している人とした。年齢階級による違いをみると、参加割合は、70歳以上の年齢層では41.9%と、50-60歳未満の就労期にあたる年齢層（29.2%）と比較して10ポイント以上高かった。世帯収入については、300万円未満の世帯の人の参加割合は31.9%で、1,000万円以上の世帯の人の45.7%と比較して低かった。

表4-3 スポーツ・趣味・学習組織への参加のクロス表（%）
—年齢階級、性、世帯年収別

		n	参加している	参加していない	計
年齢階級	50-60歳未満	226	29.2	70.8	100.0
	60-70歳未満	333	35.1	64.9	100.0
	70歳以上	296	41.9	58.1	100.0
性	男性	542	33.4	66.6	100.0
	女性	313	40.3	59.7	100.0
世帯年収	300万円未満	235	31.9	68.1	100.0
	300-500万円未満	220	32.7	67.3	100.0
	500-1,000万円未満	222	41.9	58.1	100.0
	1,000万円以上	105	45.7	54.3	100.0

注)無回答は除外して集計。

(3) 生協・ボランティア組織 (表4-4)

生協・ボランティア組織に参加している人とは、「消費生活協同組合(生協)」、「市民運動・消費者のグループ」あるいは「ボランティアのグループ」のいずれかに参加している人とした。年齢階級による違いをみると、全ての年齢層で20%未満であり、大きな違いはない。性別についてみると、女性では23.0%と男性の16.6%よりも多少高くなっている。世帯収入による違いをみると、300万円未満と300-500万円未満の世帯の人では15%程度であるのに対し、500-1,000万円未満の世帯の人では23.4%、1,000万円以上の世帯の人では31.4%となっており、世帯年収が高まるに伴って参加割合が高くなる傾向がみられた。

表4-4 生協・ボランティア組織参加のクロス表 (%)
—年齢階級、性、世帯年収別

		n	参加している	参加していない	計
年齢階級	50-60歳未満	226	19.0	81.0	100.0
	60-70歳未満	333	19.8	80.2	100.0
	70歳以上	296	17.9	82.1	100.0
性	男性	542	16.6	83.4	100.0
	女性	313	23.0	77.0	100.0
世帯年収	300万円未満	235	15.3	84.7	100.0
	300-500万円未満	220	15.5	84.5	100.0
	500-1,000万円未満	222	23.4	76.6	100.0
	1,000万円以上	105	31.4	68.6	100.0

注)無回答は除外して集計。

(4) その他の組織 (表4-5)

その他の組織に参加している人とは、「政治関係の団体や会」、「業界団体・同業者団体」、「宗教の団体や会」あるいは「同窓会」のいずれかに参加している人とした。年齢階級による違いは大きくなかった。性による違いは、参加割合が男性では52.4%と、女性の43.1%よりもおよそ10ポイント程度高かった。世帯年収による違いについては、300万円未満の世帯の人の参加割合が40.9%と、他の年収の世帯の人と比較して20ポイント程度低かった。

表4-5 その他の組織への参加のクロス表 (%)
一年齢階級、性、世帯年収別

		n	参加している	参加していない	計
年齢階級	50-60歳未満	226	46.0	54.0	100.0
	60-70歳未満	333	50.5	49.5	100.0
	70歳以上	296	49.7	50.3	100.0
性	男性	542	52.4	47.6	100.0
	女性	313	43.1	56.9	100.0
世帯年収	300万円未満	235	40.9	59.1	100.0
	300-500万円未満	220	53.6	46.4	100.0
	500-1,000万円未満	222	53.6	46.4	100.0
	1,000万円以上	105	59.0	41.0	100.0

注) 無回答は除外して集計。

3) 組織類型別にみた参加頻度の分布 (表4-6)

組織への参加している頻度については、組織の類型別にその頻度を質問している。そのため、ここでは組織の類型別に参加頻度を示すことにする。組織に参加していない人や組織の参加について無回答の人は除外している。月に1回以上参加している人の割合は、「スポーツ・趣味・学習組織」では89.2%、「生協・ボランティア組織」では75.9%と50%を超えていた。他方、「地縁的組織」については、この割合は44.0%であり、「スポーツ・趣味・学習組織」や「生協・ボランティア組織」と比較して参加割合は高かったものの、参加している人に限定した場合の参加頻度は低い傾向がみられた。

表4-6 組織への参加頻度の単純集計 (%)

	n	週4日以上	週2~3日	週1日	月2~3日程度	月1日程程度	年に数回程度	ほとんど ／まったく しない	無回答	計
地縁的組織	487	2.3	4.3	6.0	11.3	20.1	31.0	21.7	3.3	100.0
スポーツ・趣味・学習組織	307	10.4	17.9	24.8	22.1	14.0	7.8	1.0	2.0	100.0
生協・ボランティア組織	162	5.5	9.3	33.9	13.0	14.2	11.7	9.3	3.1	100.0
その他の組織	419	1.7	2.4	6.7	6.7	14.6	50.6	16.2	1.2	100.0

注) 組織に参加していない人は除外。

4) 組織類型別にみた参加頻度と回答者の属性との関連

(1) 地縁的組織 (表4-7)

地縁組織への参加頻度が年齢階級、性、収入階層によってどのように異なるかを分析した。参加頻度は、年齢階級および世帯年収による違いがみられた。週に1日以上という人の割合は、50-60歳未満あるいは60-70歳未満の年齢層では10%以下であったが、70歳以上では20%程度と2倍以上であった。世帯年収による違いはみられたが、収入の多寡による一定の傾向をみいだすことはできなかった。性による明らかな違いはなかった。

表4-7 地縁的組織への参加頻度のクロス表 (%)

—年齢階級、性、世帯年収別

		n	週に1日以上	月に1日から3日程度	年に数回程度・ほとんど/まったくしない	計
年齢階級	50-60歳未満	85	5.9	22.4	71.8	100.0
	60-70歳未満	190	8.9	34.7	56.3	100.0
	70歳以上	196	19.9	34.7	45.4	100.0
性	男性	292	12.7	31.8	55.5	100.0
	女性	179	13.4	33.5	53.1	100.0
世帯年収	300万円未満	137	19.0	35.8	45.3	100.0
	300-500万円未満	121	7.4	41.3	51.2	100.0
	500-1,000万円未満	112	11.6	25.0	63.4	100.0
	1,000万円以上	64	10.9	25.0	64.1	100.0

注1) 無回答は除外して集計。

注2) カテゴリー区分は、週に1日より以上については「週に4日以上」「週に2~3日」そして「週に1日」への回答を合計したもの、月に1~3日については「月に2~3日」と「月に1回程度」への回答を合計したもの、である。

(2) スポーツ・趣味・学習組織 (表4-8)

スポーツ・趣味・学習組織への週に1日以上参加しているという人の割合は、年齢階級別でも大きな違いはみられなかった。性による違いについては、週に1日以上参加しているという人の割合は、女性で60.0%であるのに対し、男子では50.0%と10ポイントの差がみられた。世帯年収による違いはみられたが、収入の多寡による一定の傾向はみられなかった。

表4-8 スポーツ・趣味・学習組織への参加頻度のクロス表 (%)
—年齢階級、性、世帯年収別

		n	週に1日以上	月に1~3日 程度	年に数回程 度・ほとんど/ まったくしない	計
年齢階級	50-60歳未満	65	52.3	36.9	10.8	100.0
	60-70歳未満	117	50.4	41.0	8.5	100.0
	70歳以上	119	58.8	32.8	8.4	100.0
性	男性	176	50.0	36.9	13.1	100.0
	女性	125	60.0	36.8	3.2	100.0
世帯年収	300万円未満	73	60.3	32.9	6.8	100.0
	300-500万円未満	71	57.7	31.0	11.3	100.0
	500-1,000万円未満	92	47.8	42.4	9.8	100.0
	1,000万円以上	47	53.2	36.2	10.6	100.0

注1) 無回答は除外して集計。

注2) カテゴリー区分は、週に1日より以上については「週に4日以上」「週に2~3日」そして「週に1日」への回答を合計したもの、月に1~3日については「月に2~3日」と「月に1回程度」への回答を合計したもの、である。

(3) 生協・ボランティア組織 (表4-9)

週に1日以上参加するという人の割合を年齢階級別に比較してみると、50-60歳未満と60-70歳未満では10%未満であるのに対して、70歳以上では19.9%と2倍以上の違いがみられた。世帯年収による違いをみると、週に1日以上という参加頻度の人の割合は300万円未満の世帯の人では19.0%と、300-500万円、500-1,000万円未満、1,000万円以上の世帯の人の割合の2倍程度高かった。性による明らかな違いはみられなかった。

表4-9 生協・ボランティア組織への参加頻度のクロス表 (%)
—年齢階級、性、世帯年収別

		n	週に1日以上	月に1~3日程度	年に数回程度・ほとんど/まったくしない	計
年齢階級	50-60歳未満	85	5.9	22.4	71.8	100.0
	60-70歳未満	190	8.9	34.7	56.3	100.0
	70歳以上	196	19.9	34.7	45.4	100.0
性	男性	292	12.7	31.8	55.5	100.0
	女性	179	13.4	33.5	53.1	100.0
世帯年収	300万円未満	137	19.0	35.8	45.3	100.0
	300-500万円未満	121	7.4	41.3	51.2	100.0
	500-1,000万円未満	112	11.6	25.0	63.4	100.0
	1,000万円以上	64	10.9	25.0	64.1	100.0

注1)無回答は除外して集計。

注2)カテゴリー区分は、週に1日より以上については「週に4日以上」「週に2~3日」そして「週に1日」への回答を合計したもの、月に1~3日については「月に2~3日」と「月に1回程度」への回答を合計したもの、である。

(4) その他の組織 (表4-10)

政治・業界・宗教・同窓会などの組織に週1日以上参加する人の割合を性別で比較すると、女性が13.4%となっており、男性の9.6%より高かった。世帯年収別にみると、週1日以上参加する人の割合には差がみられたが、年収の多寡による一定の傾向はみられなかった。年齢階級別にみた分布には明らかな違いはみられなかった。

表4-10 政治・業界・宗教・同窓会などの集会的活動組織への参加頻度のクロス表 (%)
—年齢階級、性、世帯年収別

		n	週に1日以上	月に1～3日 程度	年に数回程 度・ほとんど/ まったくしない	計
年齢階級	50-60歳未満	102	9.8	14.7	75.5	100.0
	60-70歳未満	166	10.8	24.7	64.5	100.0
	70歳以上	146	11.6	22.6	65.8	100.0
性	男性	280	9.6	21.4	68.9	100.0
	女性	134	13.4	21.6	64.9	100.0
世帯年収	300万円未満	96	12.5	28.1	59.4	100.0
	300-500万円未満	117	7.7	22.2	70.1	100.0
	500-1,000万円未満	116	13.8	14.7	71.6	100.0
	1,000万円以上	61	6.6	21.3	72.1	100.0

注1) 無回答は除外して集計。

注2) カテゴリー区分は、週に1日より以上については「週に4日以上」「週に2～3日」そして「週に1日」への回答を合計したもの、月に1～3日については「月に2～3日」と「月に1回程度」への回答を合計したもの、である。

5) 最も重要だと思う参加組織

(1) 組織別の割合 (表4-11)

参加組織の中で最も重要と思うものについて質問したところ、「町内会・自治会」が約17.9%、次いで「同窓会」「スポーツ関係組織」および「趣味の会」がそれぞれ10%程度と続いていた。

表4-11 重要だと思う参加組織の単純集計(%)

町内会・自治会	同窓会	スポーツ関係	趣味の会	宗教の団体や会	業界団体・同業者団体	婦人・老人・青年団	ボランティア	学習活動の会	消費生活協同組合
17.9	11.4	11.3	8.3	6.1	5.7	2.8	2.7	1.6	1.3
PTA	政治関係の団体や会	市民運動・消費者運動	無回答	非該当					
0.6	0.9	0.0	9.0	20.0					

注1) N=866

注2) 非該当とは、参加している組織がない、あるいは参加している組織に関する質問に無回答の人が該当する。

(2) 最も重要だと思う参加組織と回答者の属性との関連 (表4-12)

参加組織の中で最も重要なものを類型別にまとめ、参加組織の中で最も重要な組織の類型が一年齢階級、性、世帯年収別にみて異なるか分析した。年齢階級別にみると、種類別にみた場合最も選択した人の割合が高かったのが、50-60歳未満と60-70歳未満の人では「その他」の組織であり、その割合はそれぞれ44.4%、35.7%であった。70歳以上の人で最も選択した割合が高かった組織は「地縁組織」で、その割合は38.1%であった。性別では、男性では「その他」(37.4%)、女性では「スポーツ・趣味・学習組織」(35.7%)が、重要なものとして選択された組織の種類として最も多かったものであった。世帯収入別にみても、参加組織の中で最も重要な組織の類型別分布には大きな違いはなかった。

表4-12 最も重要だと思う参加組織のクロス表 (%)

一年齢階級、性、世帯年収別

		n	地縁組織	スポーツ・趣味・学習組織	ボランティア・生協等の組織	その他	計
年齢階級	50-60歳未満	144	20.8	29.2	5.6	44.4	100.0
	60-70歳未満	244	28.3	29.5	6.6	35.7	100.0
	70歳以上	223	38.1	31.4	4.5	26.0	100.0
性	男性	390	31.0	26.9	4.6	37.4	100.0
	女性	221	28.5	35.7	7.2	28.5	100.0
世帯年収	300万円未満	160	36.9	28.1	3.1	31.9	100.0
	300-500万円未満	162	30.9	29.0	3.7	36.4	100.0
	500-1,000万円未満	164	22.6	32.3	7.9	37.2	100.0
	1,000万円以上	79	29.1	32.9	6.3	31.6	100.0

注) 無回答は除外して集計。

6) 最も重要だと思う参加組織の構成員の属性

(1) 性比

重要だと思う参加組織の構成員の性比については、「女性が多い」「男性・女性半々」「男性が多い」にそれぞれ属している人がそれぞれ 20%程度であった。「すべて男性」「すべて女性」というように単一の性で構成されているという組織に属している人はそれぞれ 5%未満であった（表 4-13）。

表4-13 重要だと思う参加組織の構成員の性別比の単純集計 (%)

すべて女性	女性が多い	男性・女性 半々	男性が多い	すべて男性	無回答	非該当
4.2	19.5	23.0	19.1	3.3	1.5	29.4

注 1)N=866

重要だと思う参加組織の構成員の性別の比率と、回答者の年齢階級、性、世帯年収の関連を分析した（表 4-14）。年齢階級による違いをみると、年齢階級が上がるにしたがって「すべて男性・男性の方が多い」という人の割合が減少し、「すべて女性・女性の方が多い」という人の割合が増加していた。性別でみると、男性では「すべて男性・男性の方が多い」が 49.2%、女性では、「すべて女性・女性の方が多い」が 61.6%と、重要だと思う組織の構成員は同性が多いという特徴がみられた。世帯年収による違いについては、年収が上がるにしたがって「すべて男性・男性の方が多い」という人の割合が増加し、「すべて女性・女性の方が多い」という人の割合が減少していた。

表4-14 重要だと思う参加組織における性比のクロス表 (%)

一年齢階級、性、世帯年収別

		n	すべて男性・男性の方が多い	男性・女性半々	すべて女性・女性の方が多い	計
年齢階級	50-60歳未満	143	35.0	38.5	26.6	100.0
	60-70歳未満	239	40.2	29.3	30.5	100.0
	70歳以上	216	27.3	34.3	38.4	100.0
性	男性	382	49.2	34.8	16.0	100.0
	女性	216	7.9	30.6	61.6	100.0
世帯年収	300万円未満	156	25.6	35.9	38.5	100.0
	300-500万円未満	159	33.3	34.0	32.7	100.0
	500-1,000万円未満	162	40.7	30.9	28.4	100.0
	1,000万円以上	79	49.4	27.8	22.8	100.0

注)無回答は除外して集計。

(2) 年齢構成

重要だと思う組織の構成員の年齢構成については、「同じ年齢層がほとんど」が33.6%、「異なる年齢層が半数」が25.6%となっており、異なる年齢層がほとんどという回答は9.4%に過ぎなかった（表4-15）。

表4-15 重要だと思う参加組織の構成員の年齢構成の単純集計（%）

同じ年齢層がほとんど	異なる年齢層が半数	異なる年齢層がほとんど	無回答	非該当
33.6	25.6	9.4	2.0	29.4

N=866

重要だと思う組織の構成員の年齢構成と、回答者の年齢階級、性、世帯年収との関連を分析した（表4-16）。年齢階級別にみると、「同じ年齢層がほとんど」とする人の割合は、50-60歳未満では38.7%であるのに対し、70歳以上では54.0%と高い値を示していた。他方、「異なる年齢層がほとんど」とする人の割合は、50-60歳未満では22.5%であるのに対し、70歳以上では10.8%と低い値を示していた。性による違いについては、重要視している組織の構成員の年齢構成に差はみられなかった。世帯収入による違いについては、「同じ年齢層がほとんど」という人の割合は、300万円未満では53.5%であったが、この割合は収入が増加するにしたがって減少し、1,000万円以上では38.5%であった。逆に「異なる年齢層が半数」に関しては、300万円未満では34.8%であったが、この割合は1,000万円以上では47.4%であった。

表4-16 重要だと思う参加組織における構成員の年齢構成のクロス表（%）

—年齢階級、性、世帯年収別

		n	同じ年齢層がほとんど	異なる年齢層が半数	異なる年齢層がほとんど	計
年齢階級	50-60歳未満	142	38.7	38.7	22.5	100.0
	60-70歳未満	239	50.6	38.5	10.9	100.0
	70歳以上	213	54.0	35.2	10.8	100.0
性	男性	381	50.4	36.0	13.6	100.0
	女性	213	46.5	39.9	13.6	100.0
世帯年収	300万円未満	155	53.5	34.8	11.6	100.0
	300-500万円未満	158	51.3	34.8	13.9	100.0
	500-1,000万円未満	161	47.8	36.0	16.1	100.0
	1,000万円以上	78	38.5	47.4	14.1	100.0

注)無回答は除外して集計。

(3) 学歴

重要だと思う参加組織の構成員の学歴分布については、「同じような人がほとんど」が29.8%、「自分と異なる人が半数」が26.4%、「全く異なる人がほとんど」は11.9%であった(表4-17)。

表4-17 重要だと思う参加組織における構成員の学歴の単純集計 (%)

同じような人がほとんど	自分と異なる人が半数	異なる人がほとんど	無回答	非該当
29.8	26.4	11.9	2.4	29.4

N=866

重要だと思う組織の構成員の学歴と、年齢階級、性、世帯年収との関連を分析した(表4-18)。年齢階級および性による違いは顕著ではなかった。世帯収入による違いについては、「同じような人がほとんど」という人の割合は、300万円未満の世帯の人では38.1%であったが、1,000万円以上の世帯の人では51.3%と半数以上を占めていた。他方、「異なる人がほとんど」という人の割合は、それぞれ21.9%と11.5%であり、300万円未満の世帯の人では2倍の割合を占めていた。

表4-18 重要だと思う参加組織における構成員の学歴構成のクロス表 (%)
一年齢階級、性、世帯年収別

		n	同じような人がほとんど	自分と異なる人が半数	異なる人がほとんど	計
年齢階級	50-60歳未満	141	40.4	41.4	18.4	100.0
	60-70歳未満	236	40.7	41.5	17.8	100.0
	70歳以上	213	49.3	34.3	16.4	100.0
性	男性	380	44.2	38.7	17.1	100.0
	女性	210	42.9	39.0	18.1	100.0
世帯年収	300万円未満	155	38.1	40.0	21.9	100.0
	300-500万円未満	159	47.2	39.0	13.8	100.0
	500-1,000万円未満	159	45.3	37.1	17.6	100.0
	1,000万円以上	78	51.3	37.2	11.5	100.0

注)無回答は除外して集計。

5. 社会的サポート

1) 受領サポート

(1) 提供源別の分布 (表5-1)

受領サポートは、「心配事や困りごとがあるとき、次の人たちはどのくらい相談にのってくれますか」「日頃の生活でちょっとした手助けが必要なとき、次の人たちはどのくらい手助けをしてくれますか」「あなたにいたりや思いやりを、次の人たちはどのくらい示してくれますか」という3項目を用いて測定した。回答は、配偶者、同居家族、別居家族・親族、近所の人、友人のそれぞれについて、「かなり(4点)」「いくらか(3点)」「少し(2点)」「全くない(1点)」「該当者がいない(1点)」という選択肢を用いて、3項目に対する回答を加算した(最低点は3点、最高点は12点になる)。

受領サポートの得点をみると、配偶者からのサポート得点が最も高く、近所の人からのサポート得点が最も低かった。

表5-1 受領サポートの単純集計(点)

配偶者からの 受領サポート	同居家族 からの 受領サポート	別居家族・ 親族からの 受領サポート	近所の人 からの 受領サポート	友人からの 受領サポート
8.52	6.45	7.50	4.72	6.45

N=850

(2) 受領サポートと回答者の属性との関連 (表5-2)

年齢階級別にみると、配偶者および友人からの受領サポート得点は、50-59歳が高い。同居家族および別居家族・親族からの受領サポート得点は、年齢階級による差はみられなかった。男女別にみると、配偶者からの受領サポート得点は、男性の方が高い(つまりより多くの支援を受けている)。しかし同居家族、別居家族・親族、近所の人、友人からの受領サポート得点は、女性の方が高い。世帯年収別にみると、年収が高い人ほど、配偶者、同居家族、友人からの受領サポート得点が高いことが分かる。別居家族・親族および近所の人からの受領サポート得点は、世帯年収による差はみられなかった。

表5-2 受領サポートのクロス表(平均値(点))

一年齢階級、性、世帯年収別

		n	配偶者からの 受領サポート	同居家族 からの 受領サポート	別居家族・ 親族からの 受領サポート	近所の人 からの 受領サポート	友人からの 受領サポート
年齢階級	50-59歳	226	8.99	6.86	7.46	4.27	7.22
	60-69歳	328	8.74	6.27	7.41	4.76	6.87
	70歳以上	296	7.92	6.34	7.64	5.01	5.39
性	男性	540	9.64	6.23	7.22	4.46	6.20
	女性	310	6.57	6.84	7.99	5.17	6.88
世帯年収	300万未満	230	7.19	5.13	7.26	4.69	5.95
	300-500万未満	220	8.75	6.20	7.52	4.67	6.47
	500-1,000万未満	222	9.31	7.37	7.66	4.71	6.72
	1,000万以上	104	10.57	7.34	7.94	4.77	7.35

注)無回答は除外して集計。

2) 提供サポート

(1) 続柄別の分布 (表5-3)

提供サポートは、「次の人たちに心配事や困りごとがあるとき、あなたはどのくらい相談にのりますか」「次の人たちが日頃の生活でちょっとした手助けを必要としているとき、あなたはどのくらい手助けをしますか」「次の人たちにいたりや思いやりを、あなたはどのくらい示していますか」という3項目を用いて測定した。回答は、配偶者、同居家族、別居家族・親族、近所の人、友人のそれぞれについて、「かなり(4点)」「いづらか(3点)」「少し(2点)」「全くない(1点)」「該当者がいない(1点)」という選択肢を用いて、3項目に対する回答を加算した(最低点は3点、最高点は12点になる)。

提供サポートの得点をみると、配偶者への提供サポート得点が最も高く、近所の人への提供サポート得点が最も低かった。

表5-3 提供サポートの単純集計(点)

配偶者への 提供サポート	同居家族 への 提供サポート	別居家族・ 親族への 提供サポート	近所の人 への 提供サポート	友人への 提供サポート
8.80	7.16	8.57	5.54	7.11

N=857

(2) 提供サポートと回答者の属性との関連 (表5-4)

年齢階級別にみると、配偶者、同居家族、友人の人への提供サポート得点は、50-59歳で高い。近所への提供サポート得点のみ、70歳以上で最も高くなっている。別居家族・親族への提供サポート得点は、年齢階級による差はみられなかった。男女別にみると、配偶者への提供サポート得点は男性の方が高い。しかし別居家族・親族、近所の人、友人への提供サポート得点は、女性の方が高い。同居家族への提供サポート得点は、性による差はみられなかった。世帯年収別にみると、年収が高い人ほど、配偶者、同居家族、別居家族・親族、友人への提供サポート得点が高い。近所の人への提供サポート得点は、世帯年収による差はみられなかった。

表5-4 提供サポートのクロス表(平均値(点))
一年齢階級、性、世帯年収別

		n	配偶者への 提供サポート	同居家族 への 提供サポート	別居家族・ 親族への 提供サポート	近所の人 への 提供サポート	友人への 提供サポート
年齢階級	50-59歳	226	9.19	8.02	8.81	5.14	8.04
	60-69歳	334	9.07	7.09	8.71	5.65	7.45
	70歳以上	297	8.19	6.59	8.24	5.74	6.01
性	男性	547	9.83	7.01	8.33	5.25	6.87
	女性	310	6.97	7.43	9.00	6.06	7.53
世帯年収	300万未満	236	7.66	5.67	8.16	5.46	6.69
	300-500万未満	221	8.87	6.81	8.46	5.50	7.01
	500-1,000万未満	221	9.53	8.43	8.94	5.53	7.45
	1,000万以上	105	10.87	8.56	9.46	5.95	8.13

注)無回答は除外して集計。

3) 否定的相互作用

(1) 続柄別の分布 (表5-5)

否定的相互作用は、「次の人たちが、あなたに多くを要求しすぎていると感じることがどのくらいありますか」「次の人たちが、あなたをがっかりさせることがどのくらいありますか」「次の人たちが、あなたをイライラさせることがどのくらいありますか」という3項目を用いて測定した。回答は、配偶者、同居家族、別居家族・親族、近所の人、友人のそれぞれについて、「しばしば(4点)」「時々(3点)」「まれに(2点)」「全くない(1点)」「該当者がいない(1点)」という選択肢を用いて、3項目に対する回答を加算した(最低点は3点、最高点は12点になる)。

否定的相互作用の得点は、配偶者との相互作用で最も高かった。

表5-5 否定的相互作用の単純集計(点)

配偶者との相互作用	同居家族との相互作用	別居家族・親族との相互作用	近所の人との相互作用	友人との相互作用
5.83	4.91	5.07	3.94	4.34

N=844

(2) 否定的相互作用と回答者の属性との関連(表5-6)

年齢階級別にみると、同居家族、別居家族・親族、友人の人との否定的相互作用得点は、50-59歳で高い。男女別にみると、男性の方が配偶者との否定的相互作用得点の平均値が高い。同居家族・親族、近所、友人との相互作用の得点では、男女差はみられなかった。世帯年収別にみると、配偶者、同居家族との否定的相互作用得点は、300万未満で最も低い。別居家族・親族、近所、友人との相互作用の得点では、世帯年収による差はみられなかった。

表5-6 否定的相互作用のクロス表(平均値(点))

一年齢階級、性、世帯年収別

		n	配偶者との相互作用	同居家族との相互作用	別居家族・親族との相互作用	近所の人との相互作用	友人との相互作用
年齢階級	50-59歳	224	5.98	5.43	5.26	3.77	4.73
	60-69歳	330	6.02	4.91	5.12	3.89	4.38
	70歳以上	290	5.50	4.52	4.87	4.13	4.00
性	男性	535	6.19	4.82	4.92	3.86	4.35
	女性	309	5.21	5.07	5.34	4.07	4.32
世帯年収	300万未満	233	5.42	4.22	4.90	4.03	4.24
	300-500万未満	215	5.77	4.71	5.26	3.97	4.27
	500-1,000万未満	218	6.26	5.76	5.21	3.77	4.48
	1,000万以上	105	6.55	5.30	5.22	4.00	4.62

注)無回答は除外して集計。

6. 連結型の社会関係資本

1) 種類別にみた連結型の社会関係資本の分布

連結型の社会関係資本とよばれるつながりについて、個人的な話をする「知り合い」が、1) 町内会・自治会の役員、2) ボランティア団体・市民運動団体の役員、3) 同業組合の役員、4) 労働組合の役員、5) 役所の部課長以上の役職者、6) 都道府県庁の部課長以上の役職者、7) 市区町村の首長、8) 地方議会議員、9) 国会議員、10) 政治家の後援会の世話役、11) 新聞テレビ等の記者・ディレクター、12) 医師、13) 中小企業経営者、14) 保険の勧誘員、15) 銀行員、16) 工場作業員、17) コンピュータ・プログラマー、それぞれにいるかを尋ねた。

その単純集計をみると、地方議会議員の知り合いがいる人が9.2%、医師が18.9%であった。

表6-1 連結型の社会関係資本の単純集計(%)

	知り合いがいる比率
町内会・自治会の役員	33.3
ボランティア団体・市民運動団体の役員	9.4
同業組合の役員	6.8
労働組合の役員	2.5
役所の部課長以上の役職者	4.3
都道府県庁の部課長以上の役職者	1.4
市区町村の首長	2.1
地方議会議員	9.2
国会議員	1.8
政治家の後援会の世話役	5.4
新聞テレビ等の記者・ディレクター	2.1
医師	18.9
中小企業経営者	18.9
保険の勧誘員	6.2
銀行員	9.2
工場作業員	6.1
コンピュータ・プログラマー	4.6

N=866

2) 連結型の社会関係資本数と回答者の属性との関連 (表6-2)

連結型の社会関係資本の平均値 (つながりの数: 最小値 0、最大値 17) を男女別にみると、男性の方が女性よりも多い。世帯年収別にみると、年収が高い人ほど連結型の社会関係資本数が多い。年齢階級による差はみられなかった。

表6-2 連結型の社会関係資本のクロス表(平均値(数))
—年齢階級、性、世帯年収別

		n	link 数
年齢階級	50-59 歳	226	1.40
	60-69 歳	336	1.52
	70 歳以上	304	1.33
性	男性	551	1.60
	女性	315	1.12
世帯年収	300 万未満	240	1.10
	300-500 万未満	222	1.39
	500-1,000 万未満	222	1.64
	1,000 万以上	105	2.22

注) 無回答は除外して集計。

7. 集合的効力感

1) 集合的効力感に関する項目の分布

集合的効力感とは、地域を良くしていこうという意識を住民の多くが持っている状態のことで、集合的効力感が強い地域では、犯罪の発生率が低いことが知られている。集合的効力感は、近隣住民の一体感を示す「社会的凝集性」（この地域の人々は信頼できる、等）と、地域の問題に住民が対処しようとする意識を示す「私的社会統制」（この地域の人々は学校をさぼり路上でたむろしている子供を見たら注意する、等）の2要素に分類できる。「社会的凝集性」と「私的社会統制」に関する項目の分布を、それぞれ、表7-1と表7-2に示した。

表7-1 集合的効力感—社会的凝集性の単純集計（%）

この地域の人々は	そう思う	どちらかという とそう思う	どちらとも いえない	どちらかという とそう思わない	そう思わ ない	無回答
信頼できる	10.3	31.9	44.8	4.4	3.5	5.2
結束が強い	6.1	20.8	47.6	10.2	8.0	7.4
喜んで近所の人を手助けする	7.0	26.2	46.2	9.8	5.2	5.5
お互いにあまいうまくいっていない	1.2	5.7	47.8	20.0	18.4	7.0
同じ価値観をあまり共有していない	5.4	12.9	53.3	11.7	10.2	6.5

N = 866

表7-2 集合的効力感—私的社会統制の単純集計（%）

この地域の人々は	そう思う	どちらかという とそう思う	どちらとも いえない	どちらかという とそう思わない	そう思わ ない	無回答
学校をさぼり路上でたむろしている子供を見たら注意する	9.1	18.9	40.3	16.3	9.9	5.4
建物に落書きをしている子供を見たら注意する	14.9	28.6	33.5	11.1	6.1	5.8
大人に失礼な態度をとる子供を見たら注意する	8.9	21.1	43.5	12.7	7.7	6.0
自分の家の前で突然けんかが始まったら止めにはいる	8.5	24.8	44.8	9.2	5.9	6.7
最寄りの集会所が閉鎖されそうになったら廃止されないよう行動する	15.0	26.6	39.4	7.3	5.8	6.0

N = 866

2) 集合的効力感と回答者の属性との関連

社会的凝集性の項目と私的社会統制の項目をそれぞれ得点化すると、どちらの指標も年齢階級が高い人で得点が高い、すなわち集合的効力感が高い傾向がうかがえた。性別や年収に関しては、顕著な違いはみあたらなかった（表7-3）。

表7-3 集合的効力感(社会的凝集性・私的社会統制)のクロス表(平均値)
一年齢階級、性、世帯年収別

		社会的凝集性	私的社会統制
全体		11.3	11.1
年齢階級	50歳代	10.6	9.8
	60歳代	11.2	11.0
	70歳以上	12.1	12.3
性	男性	11.2	11.1
	女性	11.6	11.1
世帯年収	300万円未満	11.0	10.8
	300-500万円未満	11.4	11.4
	500-1,000万円未満	11.1	11.1
	1,000万円以上	12.0	11.0

注)無回答は除外して集計

8. 地域の環境問題・犯罪認知

1) 種類別にみた地域の環境問題に対する認知の分布

居住地域（同じ町内会くらいの範囲）の環境問題については、「空き缶やタバコのポイ捨て」が最も多く、「よく見かける」26.8%、「たまに見かける」43.5%という状況であった。次いで多かったのは「違法駐車をしている自転車」で、「よく見かける」19.3%、「たまに見かける」46.1%となっていた（表8-1）。

表8-1 地域の環境問題の種類別認知の単純集計（%）

	まったく見かけない	あまり見かけない	たまに見かける	よく見かける	無回答
違法駐車をしている自転車	5.9	24.7	46.1	19.3	4.0
スプレーによる落書き	30.7	43.8	17.8	2.8	5.0
空き缶やタバコのポイ捨て	4.5	21.6	43.5	26.8	3.6

N = 866

2) 種類別にみた地域の環境問題に対する認知と回答者の属性との関連

属性別にみると問題の種類によって傾向が異なり、「違法駐輪」については50～60歳代で「よく」または「たまに見かける」の割合が高く、「スプレーによる落書き」は70歳以上でその割合が高かった。「空き缶やタバコのポイ捨て」は「60歳代」で見かける割合が高かった（表8-2）。

表8-2 地域の環境問題の種類別認知のクロス表（%）

一年齢階級、性、世帯年収別

		違法駐車をしてい る自転車	スプレーによる 落書き	空き缶やタバコの ポイ捨て
年齢階級	50歳代	70.8	17.9	72.6
	60歳代	70.9	22.4	74.5
	70歳以上	62.5	23.7	71.2
性	男性	71.5	23.3	72.6
	女性	62.1	18.7	73.4
世帯年収	300万円未満	70.8	21.8	75.3
	300-500万円未満	65.7	21.4	75.6
	500-1,000万円未満	71.2	23.4	70.6
	1,000万円以上	70.5	20.8	76.5

注1)各項目とも、「よく見かける」「たまに見かける」と回答した人の合計割合を示している

注2)無回答は除外して集計

3) 地域の犯罪に対する認知の分布

居住地域で何らかの事件や犯罪を見たり聞いたりしたことがある人は、回答者全体の70.0%を占めた(表8-3)。最も多い事件・犯罪は「自転車・バイク盗」39.4%で、次いで「ひったくり」29.3%、「泥棒・空き巣」24.0%となっていた(表8-4)。

表8-3 地域の犯罪に対する認知の単純集計 (%)

	ある	ない	無回答
居住地域で事件・犯罪を見たり聞いたりしたことがある	70.0	26.1	3.9

N = 866

表8-4 地域の犯罪に対する認知の単純集計 (%)

	見たり聞いたりした ことがある人の割合
自動車・バイク盗	39.4
ひったくり	29.3
泥棒・空き巣	24.0
自転車盗	17.6
詐欺・悪質商法	16.7
車上ねらい	15.8
痴漢	11.7
建物・自動車の落書き・破壊	11.7
放火	9.6
不審者からの声掛け	7.0
恐喝	2.7
その他	2.7

N = 866

4) 地域の犯罪に対する認知と回答者の属性との関連

属性別にみると、「60 歳代」「男性」「年収 300～1000 万円」という特性の人で、犯罪を見たり聞いたりしたことがある人の割合が高くなっていた（表 8－5）。

表 8－5 地域の犯罪に対する認知のクロス表（％）
一年齢階級、性、世帯年収別

		何らかの事件・犯罪を見たり 聞いたりしたことがある人の割合
年齢階級	50 歳代	69. 2
	60 歳代	75. 5
	70 歳以上	72. 6
性	男性	74. 1
	女性	70. 6
世帯年収	300 万未満	69. 9
	300-500 万未満	77. 3
	500-1,000 万未満	77. 8
	1,000 万以上	71. 8

注)無回答は除外して集計

9. 地域への愛着、地域への満足度

1) 地域への愛着

現在住んでいる地域に「愛着を感じている」と答えた人は、回答者全体では 66.3%であった（「そう思う」または「どちらかといえばそう思う」の割合を合計）。「これからもずっと住み続けたい」と答えた人は、65.7%であった（同上）。7割弱の人が、現在住んでいる地域に多少とも愛着を感じていることがうかがえる（表9-1）。

「愛着を感じている」と「ずっと住み続けたい」の2項目を合算し、得点が高いほど地域への愛着が強いことを表すように得点化した。その得点の平均値を属性別にみると、高齢になるほど地域への愛着が強いことがうかがえた。性別や世帯年収については、顕著な違いは見当たらなかった（表9-2）。

表9-1 地域への愛着の単純集計（%）

この地域に	そう思う	どちらかといえば そう思う	どちらとも いえない	どちらかといえば そう思わない	そう思わない	無回答
愛着を感じている	29.8	36.5	21.4	5.2	3.5	3.7
これからもずっと 住み続けたい	35.3	30.4	22.4	4.3	4.3	3.3

N = 866

表9-2 地域への愛着のクロス表（平均値）

一年齢階級、性、世帯年収別

全体		5.8
年齢階級	50歳代	5.3
	60歳代	5.7
	70歳以上	6.3
性	男性	5.8
	女性	5.7
世帯年収	300万円未満	5.7
	300-500万円未満	5.8
	500-1,000万円未満	5.6
	1,000万円以上	5.9

注)無回答は除外して集計

2) 地域への満足度

現在住んでいる地域への満足度をたずねたところ、「満足している」22.4%、「どちらかといえば満足している」49.1%で、両者を合わせると、約7割の人が居住地域に満足していることがわかった（表9-3）。

表9-3 地域への満足度の単純集計（%）

満足している	どちらかといえば満足している	どちらともいえない	どちらかといえば不満である	不満である	無回答
22.4	49.1	20.6	5.0	1.7	1.3

N = 866

属性別にみると、年齢や年収が高い人の方が、居住地域に満足している人の割合が多いことがうかがえた。性別では、男性の方が女性よりも満足度が高かった（表9-4）。

表9-4 地域への満足度のクロス表（%）

一年齢階級、性、世帯年収別

		「満足」または「どちらかといえば満足」の割合
年齢階級	50歳代	71.3
	60歳代	71.2
	70歳以上	74.5
性	男性	74.2
	女性	69.1
世帯年収	300万円未満	68.2
	300-500万円未満	72.3
	500-1,000万円未満	71.2
	1,000万円以上	83.6

注)無回答は除外して集計

10. 孤独感、生活満足度

1) 孤立感

「人づきあいが足りないと感じる」ことが「よくある」または「時々ある」と答えた人は、合わせて 50.5%であった。「疎外されているように感じる」ことが「よく」または「時々ある」人は 17.9%、「他の人たちから孤立しているように感じる」ことが「よく」または「時々ある」人は 24.9%であった（表 10-1）。

表10-1 孤独感の単純集計 (%)

	ほとんどない	時々ある	よくある	無回答
人づきあいが足りないと感じる	46.0	39.0	11.5	3.5
疎外されているように感じる	74.2	16.2	1.7	7.9
他の人たちから孤立しているように感じる	67.7	20.9	4.0	7.4

N = 866

これらの項目を合算して、得点が高いほど孤独感が強いことを表すように得点化した。その得点を属性別にみると、女性よりも男性の方が、また年収の低い人の方が、孤独感が強い傾向がうかがえた。年齢階級別では顕著な違いは見当たらなかった（表 10-2）。

表10-2 孤独感のクロス表（平均値）

一年齢階級、性、世帯年収別

全体		1.2
年齢階級	50歳代	1.2
	60歳代	1.1
	70歳以上	1.3
性	男性	1.3
	女性	1.0
世帯年収	300万未満	1.4
	300-500万未満	1.2
	500-1,000万未満	1.1
	1,000万以上	0.8

注)無回答は除外して集計

2) 生活満足度

現在の生活全般にどのくらい満足しているかをたずねた結果、「満足している」13.6%、「どちらかといえば満足している」44.7%で、これらを合わせると肯定的に評価している人は回答者全体の58.3%を占めた。他方、「どちらかといえば不満である」9.7%、「不満である」3.8%といった否定的な評価をしている人は、13.5%であった（表10-3）。

表10-3 生活満足度の単純集計（%）

満足している	どちらかといえば満足している	どちらともいえない	どちらかといえば不満である	不満である	無回答
13.6	44.7	27.4	9.7	3.8	0.8

N = 866

属性別にみると、「70歳以上」の人ではそれ以下の年齢層よりも生活に満足している人の割合が高かった。また、年収が多くなるほど生活に満足している人の割合は顕著に高く、年収が「300万円未満」の人では生活に満足している人が42.7%であるのに対し、「1000万円以上」の人では82.7%と、生活に満足している人の割合は2倍近く増えていた。性別では特に違いが見当たらなかった（表10-4）。

表10-4 生活満足度のクロス表（%）

一年齢階級、性、世帯年収別

		「満足」または「どちらかといえば満足」の割合
年齢階級	50歳代	57.6
	60歳代	56.7
	70歳以上	62.0
性	男性	58.4
	女性	59.6
世帯年収	300万円未満	42.7
	300-500万円未満	62.2
	500-1,000万円未満	62.2
	1,000万円以上	82.7

注) 無回答は除外して集計

11. パソコンや携帯電話の利用

1) 利用内容

住民のインターネットや携帯の利用内容について、メールでの利用、ウェブの閲覧、電子掲示板や会議室・チャットの利用の各側面から測定した。

パソコンでメールを利用している人は 26.8%、携帯電話でメールを利用している人は 52.8%、パソコンでウェブ検索をしている人は 33.0%、携帯電話でウェブ検索をしている人は 13.9%であった。電子掲示板や会議室、チャットの利用は 4.7%であった（表 11-1）。

表 11-1 パソコン・携帯電話の利用内容の単純集計(%)

	している	していない	無回答
パソコンでのメールを利用	26.8	65.2	8.0
携帯電話でのメールを利用	52.8	41.8	5.4
パソコンでのウェブ検索	33.0	58.0	9.0
携帯電話でのウェブ検索	13.9	76.9	9.2
電子掲示板や会議室、チャットの利用	4.7	86.3	9.0

N=866

パソコンや携帯電話の利用内容が、年齢階級、性、世帯年収によってどのように異なるかをみてみた（表 11-2）。年齢階級による差が著しく、年齢階級が 50～59 歳の人では、パソコンでメールを利用、パソコンでウェブ検索、携帯電話でメールを利用のいずれも半数を超えていたものの、70 歳以上の人では携帯でメールを利用する人の割合が 30%を超えていたものの、それ以外の利用割合は 20%に満たなかった。性別による差をみると、パソコンでメール、パソコンでのウェブ検索をしている割合が女性よりも男性で高かった。世帯年収による差も著しく、世帯年収が 1000 万円以上の人では、300 万未満の人と比較して、パソコンでメール利用、パソコンでウェブ検索、携帯電話でウェブ検索のそれぞれの割合はいずれも 2 倍程度に達していた。

表 11-2 パソコン・携帯電話の利用内容のクロス表(%)

—年齢階級、性、世帯年収、居住する自治体の人口規模別

		パソコンで のメール	携帯電話 でのメール	パソコンでの ウェブ検索	携帯電話 でのウェブ 検索	電子掲示板や会 議室、チャットの 利用
年齢階級	50-59 歳	51.4	84.0	62.3	33.2	11.2
	60-69 歳	28.0	57.3	36.7	10.1	3.2
	70 歳以上	11.3	30.1	12.4	5.7	2.4
性	男性	35.9	55.3	41.4	16.2	6.2
	女性	17.2	56.6	27.4	13.8	3.4
世帯年収	300 万円未満	14.2	44.7	17.0	9.7	2.4
	300-500 万円未満	28.0	60.2	38.8	15.1	4.4
	500-1,000 万円未満	41.2	62.3	46.8	18.6	7.9
	1,000 万円以上	48.5	71.3	63.0	24.0	9.0

注) 無回答は除外して集計。

2) インターネットの利用時間

インターネットの1日の利用時間を質問したところ、「ほとんど利用していない」が53.7%、「30分未満」が16.2%、「30分から1時間未満」が11.1%であり、利用時間が1時間未満という人は合計で81.0%に達していた（表11-3）。

表11-3 インターネットの1日の利用時間の単純集計(%)

ほとんど 利用していない	30分未満	30分から1時間未満	1-2時間未満	2時間以上	無回答
53.7	16.2	11.1	8.6	6.8	3.6

N=866

インターネットの利用時間が、年齢階級、性、世帯年収によってどのように異なるかをみてみた（表11-4）。年齢階級による差が著しく、「ほとんど利用していない」という人の割合は、50～59歳では26.7%であるのに対し、70歳以上では78.6%であった。性別による差も多少みられ、「ほとんど利用していない」という人の割合は男性の51.3%に対し、女性では63.3%と10ポイント以上低かった。世帯年収による差も著しく、「ほとんど利用していない」という人の割合は、世帯年収が300万円未満の人では72.9%に対し、1,000万円以上の人では34.3%と半分以下であった。

表11-4 インターネットの1日の利用時間のクロス表(%)

—年齢階級、性、世帯年収、居住する自治体の人口規模別

	n	ほとんど 利用して いない	30分未満	30分から 1時間未満	1-2時間 未満	2時間 以上	計
年齢階級							
50-59歳	225	26.7	27.6	16.4	14.7	14.6	100.0
60-69歳	330	56.1	15.5	12.4	10.0	6.0	100.0
70歳以上	280	78.6	9.6	6.4	3.2	2.2	100.0
性							
男性	530	51.3	15.9	13.2	11.3	8.3	100.0
女性	305	63.3	18.4	8.5	4.9	4.9	100.0
世帯年収							
300万円未満	225	72.9	10.7	8.4	3.1	4.9	100.0
300-500万円未満	218	51.4	20.2	10.6	12.8	5.0	100.0
500-1,000万円未満	221	43.9	19.0	14.5	12.2	10.4	100.0
1,000万円以上	102	34.3	23.5	19.6	10.8	11.8	100.0

注)無回答は除外して集計。

12. 健康維持のための習慣や行動

1) 健康維持習慣

飲酒、運動、喫煙に関する習慣について調べた（表 12-1）。飲酒については、「清酒に換算して1日平均1合未満」という健康にとって問題のない飲酒習慣を身につけている人は58.8%、運動については、「週に2回以上、1回あたり30分以上の運動を1年以上継続」という健康によって良い運動習慣を身につけている人は43.0%、「習慣的な喫煙をしていない」という人は77.0%であった。以上のように、飲酒、運動、喫煙という3種類の習慣の中では、運動において健康にとって良い習慣を身につけている人の割合が最も低く、この割合は50%未満であった。

表 12-1 健康維持習慣の単純集計(%)

	該当	非該当	無回答
清酒で換算して1日平均1合未満の飲酒	58.8	40.4	0.8
週に2回以上、1回あたりの30分以上の運動を1年以上継続	43.0	55.9	1.1
習慣的な喫煙をしていない	77.0	22.4	0.6

N=866

以上の習慣の実施割合が、年齢階級、性、世帯年収によって異なるかみてみた（表 12-2）。年齢階級による差が大きかったのは運動習慣のある人の割合であり、この割合は50~59歳の人では32.7%であるのに対し、70歳以上の人では53.0%と20ポイント以上低かった。性による差が大きかったのは、飲酒であり、適度な飲酒習慣がないという人の割合は女性では80%を超えていたが、男性ではそれぞれ50%未満であった。世帯年収による差は大きくなかった。

表 12-2 健康維持習慣のクロス表(%)

一年齢階級、性、世帯年収、居住する自治体の人口規模別

		適度な飲酒	運動習慣あり	喫煙習慣なし
年齢階級	50-59歳	52.2	32.7	65.5
	60-69歳	56.7	42.2	77.3
	70歳以上	67.4	53.0	86.7
性	男性	44.9	44.5	72.2
	女性	84.3	41.7	86.6
世帯年収	300万円未満	62.7	46.8	79.7
	300-500万円未満	57.0	43.2	76.9
	500-1,000万円未満	54.5	41.4	73.9
	1,000万円以上	53.3	40.0	74.3

注1) 適度な飲酒の人とは、清酒で換算して1日平均1合未満の飲酒をしている人である。

運動習慣ありの人とは、週に2回以上、1回あたりの30分以上の運動を1年以上継続している人である。

注2) 無回答は除外して集計。

2) 食生活への配慮

朝食の摂取、野菜の摂取、糖分・塩分を控える、無農薬や有機栽培の野菜などを購入する、栄養のバランスに気を付ける、といった食生活上の配慮をどの程度行っているかを質問した。

配慮している（「あてはまる」「ややあてはまる」の回答の合計）人の割合は、朝食の摂取、野菜の摂取についてはいずれも80%を超えていた。糖分・塩分を控える、栄養のバランスについても配慮している人の割合は60%を超えていた。無農薬や有機栽培の野菜の購入については、配慮している人の割合は27.0%と、配慮しているという人の割合は他の項目の半分以下であった（表12-3）。

表 12-3 食生活への配慮の単純集計 (%)

	あてはまる	ややあてはまる	どちらともいえない	あまりあてはまらない	まったくあてはまらない	無回答
毎日朝食を食べる	78.2	8.3	2.7	4.7	3.7	2.4
なるべく野菜を食べる	52.1	29.2	10.1	4.0	0.6	4.0
糖分・塩分を摂りすぎない	33.4	33.9	18.7	8.9	1.2	3.9
無農薬や有機栽培の野菜などを購入	9.9	17.1	33.7	24.6	10.3	4.4
栄養のバランスに気をつけて食事	26.1	36.8	21.6	9.3	2.4	3.8

N=866

配慮している（「あてはまる」「ややあてはまる」の回答の合計）人の割合が、年齢階級、性、世帯年収によって異なるかみてみた（表12-4）。年齢階級による差については、なるべく野菜をとる人の割合を除いては、年齢階級が高くなるに伴って配慮している人の割合が高くなった。性別による差については、毎日野菜をとる人の割合を除いては、女性の方が男性と比較して配慮している人の割合が高かった。世帯年収による差は大きくなかった。

表 12-4 食生活への配慮のクロス表 (%)

—年齢階級、性、世帯年収、居住する自治体の人口規模別

	毎日朝食を食べる	なるべく野菜をとる	糖分・塩分を摂りすぎない	無農薬や有機栽培の野菜を購入	栄養のバランスに気をつける
年齢階級					
50-59 歳	81.9	84.1	60.6	21.2	58.0
60-69 歳	88.0	82.4	69.8	27.5	63.3
70 歳以上	94.8	88.0	78.2	35.1	74.0
性					
男性	88.5	80.2	66.0	25.3	59.4
女性	89.0	92.5	77.0	33.3	76.0
世帯年収					
300 万円未満	87.5	82.9	67.9	23.4	57.0
300-500 万円未満	87.1	85.5	74.8	32.9	72.2
500-1,000 万円未満	90.0	86.4	65.9	24.0	65.5
1,000 万円以上	86.5	80.8	69.2	31.7	67.6

注 1) 各項目とも、「あてはまる」「まああてはまる」と回答した人の合計割合を示している。

注 2) 無回答は除外して集計。

13. 健康

1) 健康度自己評価

健康度自己評価については、「全般的に言って、あなたの現在の健康状態はいかがですか」と質問し、測定した。「よい」が21.7%、「まあよい」が28.8%であり、約半数の人がよいと自己評価していた（表13-1）。

表13-1 健康度自己評価の単純集計(%)

よい	まあよい	ふつう	あまりよくない	よくない	無回答
21.7	28.8	32.2	12.7	3.7	0.9

N=866

健康度自己評価が、年齢階級、性、世帯年収によって異なるかをみてみた（表13-2）。年齢階級別に差がみられ、「よい」「まあよい」の回答の合計は、50～59歳では54.6%であったのに対し、70歳以上では44.5%と10ポイント程度低かった。世帯年収による差も大きく、「よい」「まあよい」の回答の合計は、300万円未満では42.6%であったが、1,000万円以上では62.8%と20ポイント程度高かった。性別の分布については、健康度自己評価の回答の分布に大きな差がみられなかった。

表13-2 健康度自己評価のクロス表(%)

—年齢階級、性、世帯年収、居住する自治体の人口規模別

		n	よい	まあよい	ふつう	あまりよくない	よくない	計
年齢階級	50-59歳	225	21.3	33.3	31.6	11.6	2.2	100.0
	60-69歳	334	24.3	29.9	32.6	9.3	3.9	100.0
	70歳以上	299	19.8	24.7	33.1	17.7	4.7	100.0
性	男性	546	23.8	28.4	30.8	13.2	3.8	100.0
	女性	312	18.6	30.1	35.6	12.2	3.5	100.0
世帯年収	300万円未満	235	17.9	24.7	35.7	15.3	6.4	100.0
	300-500万円未満	220	22.3	30.9	31.4	10.9	4.5	100.0
	500-1,000万円未満	222	23.0	31.1	34.7	9.9	1.3	100.0
	1,000万円以上	105	29.5	33.3	23.8	10.5	2.9	100.0

注)無回答は除外して集計。

2) 精神的健康

精神的健康は、6項目で構成されているスケールを利用して測定した。質問内容は、過去1か月間に6種類の項目で示された状態をそれぞれどのくらいの頻度で経験していたか、を尋ねるというものであった。表には、6項目それぞれの回答分布を示した(表13-3)。いずれの状態とも、神経過敏に感じた、という項目を除く5項目については、「いつも」あるいは「たいてい」との回答は合計でも5%未満であった。

以上のスケールを用いて、うつ病や不安障害の可能性が高い人を選び出すことができる。その方法とは、各項目の「いつも」「たいてい」「ときどき」「少しだけ」「まったくない」という回答の選択肢にそれぞれ5点から1点までを配点し、その合計得点が15点以上の人をうつ病や不安障害の可能性が高い人とするものである。15点以上の方は、無回答のため判断ができなかった人も分母に含めた場合、9.6%であった。

表13-3 精神的健康にする項目の単純集計(%)

	いつも	たいてい	ときどき	少しだけ	まったくない	無回答
神経過敏に感じた	3.5	3.0	18.0	27.4	43.5	4.6
絶望的だと感じた	1.5	1.5	6.5	17.4	67.4	5.7
そわそわしたり、落ち着かなく感じた	0.8	1.2	7.5	24.8	59.9	5.8
気分が落ち込み、何が起こっても気が晴れないように感じた	1.8	1.4	8.5	28.1	55.3	4.9
何をするにも骨折りと感じた	1.7	1.4	10.9	28.5	52.2	5.3
自分は価値のない人間と感じた	1.4	1.2	6.7	20.2	65.0	5.5

N=866

うつ病や不安障害の可能性が高い人の割合が、年齢階級、性、世帯年収によって分布が異なるかをみてみた(表13-4)。世帯年収別に差がみられ、うつ病や不安障害の可能性が高い人の割合は、300万円未満では13.9%であったが、1,000万円以上では2.9%と5分の1の割合であった。

表13-4 うつ病や不安障害の可能性が高い人の割合のクロス表(%)
一年齢階級、性、世帯年収、居住する自治体の人口規模別

		n	可能性が高い	可能性が低い	計
年齢階級	50-59歳	224	10.7	89.3	100.0
	60-69歳	331	8.8	91.2	100.0
	70歳以上	289	11.1	88.9	100.0
性	男性	537	9.1	90.9	100.0
	女性	307	11.7	88.3	100.0
世帯年収	300万円未満	230	13.9	86.1	100.0
	300-500万円未満	218	9.2	90.8	100.0
	500-1,000万円未満	219	9.1	90.9	100.0
	1,000万円以上	105	2.9	97.1	100.0

注1) 無回答は除外して集計。

3) 通院

調査時点で、病院や診療所に通っているか否かを質問した。通院には、往診、薬だけ出してもらっている場合も含んだ。回答結果は、通院している人が 66.0%と約半数を占めていた（表 13-5）。

通院している理由となっている病気やけがについては、高血圧が 53.0%と最も多かった。それ以外の病気やけがはいずれも 10%に満たなかった（表 13-6）。

表 13-5 通院の有無の単純集計(%)

している	していない	無回答
66.0	32.6	1.4

N=866

表 13-6 通院している病気やけがの種類の種類(複数回答 %)

高血圧	関節リウマチ・ 関節炎	心臓病	呼吸器系疾患	悪性新生物	脳血管疾患	骨折・外傷	神経痛	その他	無回答
53.0	8.2	10.1	6.6	4.2	4.9	3.1	0.9	43.0	0.3

N=572

通院の有無について、年齢階級、性、世帯年収によって分布が異なるかをみてみた（表 13-7）。年齢階級による差が大きく、通院している人の割合は、70 歳以上では 83.5%と、50-59 歳 (50.9%) よりも 30 ポイント以上高かった。世帯年収による差もみられ、通院している人の割合は、300 万未満の人では 68.5%であるのに対し、1,000 万円以上では 60.6%と 300 万未満の人と比較して 10 ポイント程度低かった。

表 13-7 通院の有無のクロス表(%)

一年齢階級、性、世帯年収、居住する自治体の人口規模別

		n	通院している	通院していない	計
年齢階級	50-59 歳	222	50.9	49.1	100.0
	60-69 歳	335	63.0	37.0	100.0
	70 歳以上	297	83.5	16.5	100.0
性	男性	544	64.7	35.3	100.0
	女性	310	71.0	29.0	100.0
世帯年収	300 万円未満	238	68.5	31.5	100.0
	300-500 万円未満	218	67.4	32.6	100.0
	500-1,000 万円未満	219	63.0	37.0	100.0
	1,000 万円以上	104	60.6	39.4	100.0

注1) 無回答は除外して集計。

14. 政治に対する意識

1) 政治的効力感と政治家への信頼の分布（表 14—1）

「自分のようなふつうの市民には、政府のすることに対して、それを左右する力はない」という政治的効力感に関する質問に対しては、「そう思う」あるいは「どちらかといえばそう思う」との回答が計 63.0%であり、「そう思わない」あるいは「どちらかといえばそう思わない」の回答の合計の 32.8%を上回っていた。

「政治や政府は複雑なので、自分には何をやっているのかよく理解できない」という「政治リテラシー」に関わる項目については、「そう思う」あるいは「どちらかといえばそう思う」との回答が合計で 52.1%であり、「そう思わない」「どちらかといえばそう思わない」との回答の合計の 42.6%と顕著な違いはなかった。

「選挙では大勢の人々が投票するのだから、自分一人くらい投票しなくてもかまわない」という「政治的ただ乗り」に関する項目については、「そう思わない」あるいは「どちらかといえばそう思わない」との回答の合計は 82.2%であり、「そう思う」あるいは「どちらかといえばそう思う」という回答の合計の 12.0%を大幅に上回っていた。

「国会議員は、大ざっぱに言って、当選したらすぐ国民のことを考えなくなる」という政治家に対する信頼に関する項目については、「そう思う」あるいは「どちらかといえばそう思う」との回答の合計は 75.7%で、「そう思わない」あるいは「どちらかといえばそう思わない」との回答の合計の 20.8%を大きく上回っていた。

表 14—1 政治的効力感の単純集計（%）

	そう 思う	どちらか といえば そう思う	どちらかと いえばそう 思わない	そう思 わない	無回答
自分のようなふつうの市民には、政府のすることに対して、それを左右する力はない（政治的効力感）	29.9	33.1	17.1	15.7	4.2
政治や政府は複雑なので、自分には何をやっているのかよく理解できない（政治リテラシー）	19.2	32.9	20.0	22.6	5.3
選挙では大勢の人々が投票するのだから、自分一人くらい投票しなくてもかまわない（政治的ただ乗り）	3.3	8.7	16.3	65.9	5.8
国会議員は、大ざっぱに言って、当選したらすぐ国民のことを考えなくなる（政治家に対する信頼）	38.9	36.8	12.7	8.1	3.5

N=866

2) 政治に対する有効性感覚・信頼と回答者の属性との関連

(1) 政治的効力感 (表 14-2)

「自分のようなふつうの市民には、政府のすることに対して、それを左右する力はない」という「政治的効力感」に関する質問への回答については、年齢階級による違いがみられ、「そう思う」あるいは「どちらかといえばそう思う」という回答割合は、70歳以上では71.4%と、50-60歳未満や60-70歳未満で60%程度と比較して高かった。性による違いについては、「そう思う」あるいは「どちらかといえばそう思う」という回答は男性では62.8%に対し、女性では71.1%と女性の方が高かった。世帯収入については、「そう思う」あるいは「どちらかといえばそう思う」という回答割合に差がみられたものの、その多寡によって一定の傾向はみられなかった。

表 14-2 政治的効力感のクロス表 (%)

—年齢階級、性、世帯年収別

		n	そう思う、 どちらかといえ ばそう思う	そう思わない、 どちらかといえ ばそう思わない	計
年齢階級	50-60歳未満	224	62.9	37.1	100.0
	60-70歳未満	330	63.0	37.0	100.0
	70歳以上	276	71.4	28.6	100.0
性	男性	529	62.8	37.2	100.0
	女性	301	71.1	28.9	100.0
世帯年収	300万円未満	225	72.4	27.6	100.0
	300-500万円未満	215	65.6	34.4	100.0
	500-1,000万円未満	217	57.1	42.9	100.0
	1,000万円以上	103	62.1	37.9	100.0

注) 無回答は除外して集計。

(2) 政治リテラシー (表 14—3)

「政治や政府は複雑なので、自分には何をやっているのかよく理解できない」という「政治リテラシー」に関する質問への回答は、年齢階級、性、世帯年収のいずれの属性別にみても大きな違いがみられた。年齢階級別にみると、「そう思う」あるいは「どちらかといえばそう思う」という回答は、50-60歳未満では49.1%と、70歳以上の64.6%と比較して10ポイント以上高かった。性差については、「そう思う」あるいは「どちらかといえばそう思う」との回答割合は女性で65.7%と、男性の48.8%よりも20ポイント弱高かった。世帯収入による差については、「そう思う」あるいは「どちらかといえばそう思う」という回答は、300万円未満では66.2%と、1,000万円以上では43.1%と比較して20ポイント以上高かった。

表 14—3 政治的リテラシーのクロス表 (%)
—年齢階級、性、世帯年収別

		n	そう思う、 どちらかといえ ばそう思う	そう思わない、 どちらかといえ ばそう思わない	計
年齢	50-60歳未満	224	49.1	50.9	100.0
	60-70歳未満	328	51.2	48.8	100.0
	70歳以上	268	64.6	35.4	100.0
性	男性	520	48.8	51.2	100.0
	女性	300	65.7	34.3	100.0
世帯年収	300万円未満	219	66.2	33.8	100.0
	300-500万円未満	214	56.5	43.5	100.0
	500-1,000万円未満	217	43.3	56.7	100.0
	1,000万円以上	102	43.1	56.9	100.0

注) 無回答は除外して集計。

(3) 政治的ただ乗り (表 14-4)

「選挙では大勢の人々が投票するのだから、自分一人くらい投票しなくてもかまわない」という「政治的ただ乗り」に関する質問への回答については、特に世帯収入による差が大きかった。すなわち、300万円未満の世帯の人では、「そう思う」あるいは「どちらかといえばそう思う」との回答割合が15.2%で、1,000万円以上の回答割合(8.8%)と比較して約2倍であった。

表 14-4 政治的ただ乗りのクロス表 (%)
— 年齢階級、性、世帯年収別

		n	そう思う、 どちらかといえ ばそう思う	そう思わない、 どちらかといえ ばそう思わない	計
年齢	50-60 歳未満	224	17.4	82.6	100.0
	60-70 歳未満	329	10.3	89.7	100.0
	70 歳以上	263	11.8	88.2	100.0
性	男性	519	10.8	89.2	100.0
	女性	297	16.2	83.8	100.0
世帯年収	300 万円未満	217	15.2	84.8	100.0
	300-500 万円未満	214	12.6	87.4	100.0
	500-1,000 万円未満	217	10.1	89.9	100.0
	1,000 万円以上	102	8.8	91.2	100.0

注) 無回答は除外して集計。

(4) 政治家に対する信頼 (表 14-5)

「国会議員は、大ざっぱに言って、当選したらすぐ国民のことを考えなくなる」という「政治家に対する信頼」に関する質問への回答については、性、世帯年収、世帯年収という属性による差は明確でなかった。

表 14-5 政治家にたいする信頼感のクロス表 (%)
一年齢階級、性、世帯年収別

		n	そう思う、 どちらかといえ ばそう思う	そう思わない、 どちらかといえ ばそう思わない	計
年齢	50-60 歳未満	224	62.9	37.1	100.0
	60-70 歳未満	330	63.0	37.0	100.0
	70 歳以上	276	71.4	28.6	100.0
性	男性	529	62.8	37.2	100.0
	女性	301	71.1	28.9	100.0
世帯年収	300 万円未満	225	72.4	27.6	100.0
	300-500 万円未満	215	65.6	34.4	100.0
	500-1,000 万円未満	217	57.1	42.9	100.0
	1,000 万円以上	103	62.1	37.9	100.0

注)無回答は除外して集計。

3) 国・地域レベルの政治的有効性感覚

(1) 政治的有効性感覚の分布 (表 14-6)

政治に対してどの程度効力感をもっているのか、すなわち一般的な政治的有効性感覚がどの程度であるかを、国と地域レベルそれぞれについて質問した。国の政治や行政に対して自分の意見を「ほとんど反映できない」あるいは「まったく反映できない」と回答した人は合わせて75.6%であり、「かなり反映できる」あるいは「ある程度反映できる」と答えた回答者の合計(21.2%)を大きく上回っていた。地域レベルの行政に対して自分の意見を「ほとんど反映できない」あるいは「まったく反映できない」と回答した人は合わせて59.3%、「かなり反映できる」あるいは「ある程度反映できる」と回答した人の合計(36.0%)よりも高かった。国レベルと地方レベルでは、意見を反映できるとする人の割合は、国のレベルの方が低かった。

表 14-6 国あるいは地域における政治的有効性感覚の単純集計 (%)

	かなり 反映でき る	ある程度 反映でき る	ほとんど 反映できな い	まったく 反映できない	無回答
国の政治や行政に対して	1.0	20.2	53.0	22.6	3.1
この地域でまとまって何かをやるときに、その進め方などに対して	1.6	34.4	45.8	13.5	4.6

N=866

(2) 国・地域レベルの政治的有効性感覚と回答者の属性との関連

国あるいは地方レベルの政治や行政に対して自分の意見を反映できるか否か、すなわち政治的有効性感覚が、年齢階級、性あるいは世帯年収によって差がみられるかを分析した。

国政に対する政治的効力感覚については、年齢階級による差があり、「かなり反映できる」あるいは「ある程度反映できる」との回答は、50-60歳未満の人では15.5%と、70歳以上の人の25.6%と比較すると低かった。性や世帯年収による違いは顕著でなかった(表 14-7)。

地方レベルにおける政治的効力感覚については、年齢階級による差がみられ、「かなり反映できる」あるいは「ある程度反映できる」との回答は、50-60歳未満では28.8%であったのに対し、70歳以上では43.0%と10ポイント以上高く、年齢階級が高いほど意見が反映できると回答する割合が高い傾向がみられた(表 14-8)

表 14-7 国レベルの一般的な政治的有効性感覚のクロス表 (%)
一年齢階級、性、世帯年収別

		n	かなり反映できる、 ある程度反映できる	まったく反映できな い、 ほとんど反映できな い	計
年齢	50-60歳未満	226	15.5	84.5	100.0
	60-70歳未満	332	23.2	76.8	100.0
	70歳以上	281	25.6	74.4	100.0
性	男性	536	23.5	76.5	100.0
	女性	303	19.1	80.9	100.0
世帯年収	300万円未満	225	20.9	79.1	100.0
	300-500万円未満	219	23.7	76.3	100.0
	500-1,000万円未満	221	20.4	79.6	100.0
	1,000万円以上	102	18.6	81.4	100.0

注) 無回答は除外して集計。

表 14-8 地域レベルの一般的な政治的有効性感覚のクロス表 (%)
一年齢階級、性、世帯年収別

		n	かなり反映できる、 ある程度反映できる	まったく反映できな い、 ほとんど反映できな い	計
年齢	50-60歳未満	226	28.8	71.2	100.0
	60-70歳未満	332	39.6	60.4	100.0
	70歳以上	281	43.0	57.0	100.0
性	男性	536	40.2	59.8	100.0
	女性	303	33.6	66.4	100.0
世帯年収	300万円未満	222	33.8	66.2	100.0
	300-500万円未満	214	39.3	60.7	100.0
	500-1,000万円未満	219	36.5	63.5	100.0
	1,000万円以上	103	41.7	58.3	100.0

注) 無回答は除外して集計。

4) 支持政党

支持政党について質問した結果、「支持政党がない」と回答した人は54.0%、「支持政党がある」と答えた回答者が43.6%であった(表14-9)。

表14-9 支持政党の単純集計 (%)

	ある	ない	無回答
支持政党	43.6	54.0	2.3

N=866

支持政党の有無について、年齢階級、性、世帯年収による差をみてみた(表14-10)。支持政党があるとの回答割合は、年齢階級によって顕著な差がみられた。支持政党があるとの回答は、50-60歳未満の人では27.7%、60-70歳未満では46.5%、70歳以上では55.7%と、年齢階級が上がるに伴って増加していた。

表14-10 支持政党のクロス表 (%)

—年齢階級、性、世帯年収別

		n	ある	ない	計
年齢	50-60歳未満	224	27.7	72.3	100.0
	60-70歳未満	333	46.5	53.5	100.0
	70歳以上	289	55.7	44.3	100.0
性	男性	540	47.2	52.8	100.0
	女性	306	40.2	59.8	100.0
世帯年収	300万円未満	235	44.7	55.3	100.0
	300-500万円未満	220	44.5	55.5	100.0
	500-1,000万円未満	221	48.0	52.0	100.0
	1,000万円以上	104	43.3	56.7	100.0

注) 無回答は除外して集計。